

附属学校群の国際教育の推進



2019 年 3 月

筑波大学附属学校教育局

附属学校国際教育推進委員会

目 次

1. はじめに

筑波大学附属学校群における国際教育実践研究の意味

副学長・附属学校教育局教育長 茂呂雄二 3

2. 附属学校の国際教育 4

3. 共通コンセプトに基づく附属学校の国際教育の取り組み等 6

4. 各附属学校の国際教育活動

(1) 先進的教育技術交流・児童の国際交流をめざして

(附属小学校) 10

(2) 2018 年度国際教育事業について

(附属中学校) 14

(3) グローバル人材の育成を目指して

(附属高等学校) 19

(4) 2018 年度国際交流プログラムにおける生徒の海外・相互交流での活躍

(附属駒場中・高等学校) 25

(5) (総合学科 + SGH + IB) × SDGs Ver2019 へ

(附属坂戸高等学校) 31

(6) 国際教育を通じて児童・生徒の視野を広げ、未来へと続く道を作る

(附属視覚特別支援学校) 35

(7) 聴覚特別支援学校における国際教育推進事業

(附属聴覚特別支援学校) 43

(8) 附属大塚特別支援学校の国際教育の取り組み (イングリッシュルーム活動を含む)

(附属大塚特別支援学校) 49

(9) 国際的視野で物事を捉え、積極的に自己発信する桐が丘

(附属桐が丘特別支援学校) 52

(10) 附属久里浜特別支援学校の国際交流

(附属久里浜特別支援学校) 59

5. 各附属学校のイングリッシュルーム活動

(1) 留学生との交流会

(附属小学校) 65

(2) 附属中学校 イングリッシュルームの活用報告

(附属中学校) 66

(3) 附属学校のイングリッシュルーム活動について	
(附属高等学校)	67
(4) English Room：日常活動および海外研究発表とその先の支援	
(附属駒場中・高等学校)	68
(5) 楽しい英語活動と SGH 校としての活動の両立を目指して 2018-2019	
(附属坂戸高等学校)	69
(6) 附属視覚特別支援学校のイングリッシュルーム活動	
(附属視覚特別支援学校)	70
(7) イングリッシュルーム活動	
(附属聴覚特別支援学校)	73
(8) 児童生徒の主体的な学習を引き出すイングリッシュルーム	
(附属桐が丘特別支援学校)	75
6. おわりに	
これまでの国際教育を振り返って	
附属学校国際教育推進委員会委員長 濱本悟志	77
(資料) 附属学校の国際交流協定締結状況	78
報告書発行の記録	83
委員会名簿	84

1. はじめに

筑波大学附属学校群における国際教育実践研究の意味

副学長・附属学校教育局教育長 茂 呂 雄 二

筑波大学附属学校群に関する第3期中期計画の中で、国際教育あるいはグローバル人材育成に関する重要業績評価指標（KPI、Key Performance Indicator）として、『SGH対象校において、平成33年度までに海外での武者修行経験者をSGH対象生徒の80%以上に』（中期計画12）と『平成30年度までにグローバルな素養を育てるカリキュラムを開発』（中期計画49）の2つがあげられている。

このうち、中期計画12については、文部科学省によるスーパーグローバルハイスクール事業（SGH）が、遅れてSGH校に指定された一部の高校を除いて継続するものの、本年度をもって事業終了となった。中期計画12『平成33年度SGH対象生徒80%以上』のKPIの達成については確認できなくなったが、この項目の30年度KPI「SGH対象生徒の海外交流体験率：平均40～50」については既に十分に達成できている。さらには、SGH後継事業への積極的参加を通して、新たなKPI設定をふくめて、どのように目標達成を確認して行くか検討することになる。

一方の中期計画49については30年度に開発したカリキュラムを報告書で公開し、一部を『附属学校教育局研究発表会』（2月23日開催）においても報告している。

ところで、本学附属学校群は、中期目標中期計画とは独立に、従前から国際教育実践研究を続けてきている。附属学校群には3つの拠点構想に基づく実践研究があり、そのうちのひとつが「国際教育拠点」である（他の2つは「先導的教育拠点」「教師教育拠点」）。これは、「社会の要請に基づく、国際的視野をもった基礎学力の修得や生涯学習体系の基礎モデルとなる先導的な初等・中等教育拠点を形成する」とする中期目標に沿って、『自国や他国の文化を理解し、大切にすることを養い、積極的に外国の人とコミュニケーションを取る態度を養う』ことを目指している。この拠点構想に基づいて、附属各校は普段から国際教育の実践研究を続けてきている。海外の学校との連携をもとにして各国の催しに児童生徒が参加する、各国からの訪問団・見学者を受け入れて研究授業や視察に応じる、外国の障害児童・生徒のためにボランティア活動を継続する、授業の一環として国外でフィールドワークを行いそれに基づいた現地生活者の生活改善を提案するなどなど、多数で多種類の国際教育実践が展開している。この様子は、本学の国際化の理念である「国際化の日常化」をまさに先取りするものといえる。


ところで国際教育にかぎらず、エビデンスに基づいて、教育実践の教授学習効果や成果を検証することは、言うは易しいが非常に困難である。どれだけ教育作用を与えたか、費やした時間や人手、投下した予算等のインプット部分は数字になり可視化しやすい。しかし、これらのインプットがどれだけ、個々の子ども達とともに学級集団そのものを成長させ発達のベタリングをもたらしたのかを数値にするのは至難の業である。数値化しやすいという理由で指標を作ろうものならば、子ども達と集団の発達と成長には無縁の代物となり、坎々的な数値指標に基づくとはいえ、何の意味も無いことになる。

重要なことは、客観性や再現性を担保しながらも、エビデンスの意味を拡大し、子ども達と学級の質の転換を捉えることのできる、新たな指標の創造にあるように思える。このような意味で、第3期後半の3年間で中期計画49で、開発したカリキュラムを実施し検証する際には、検証のための、新たな質の評価方法論の検討する必要がある。

筑波大学附属学校群の活動の意味を明らかにする新たな指標は、国立大学附属学校のレゾナートルを問う声に対する確かな答えと成るように思う。

2. 附属学校の国際教育

国際教育の推進の必要性

 なぜ、国際教育は必要なのか？


「ヒト」や「情報」が国境を越えて高速移動している。このため、国際化に対応した能力は、一部の人だけではなく、**誰にでも必要な能力**となってきた。このような社会の中で活躍できる人材を育成することが附属学校の使命。

取引先の担当者が外国人だけど、どう接したらいいの？

海外勤務になったけど、異文化になじめるの？



海外に支店や工場をつくることになったけど、日本とは何が違うの？

 グローバル社会で求められる能力とは？

例えば、異なる国や文化の人々と臆せず積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や、相手の文化的・社会的背景を踏まえた上で、相手の意図や考えを的確に理解し、自らの考えに理由や根拠を付け加えて、論理的に説明したり、議論の中で反論したり相手を説得したりできる能力などがあげられる。



要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感、使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

国際社会における筑波大学の使命

- 21世紀において国際社会へ向けて果たすべき本学の役割は、
 - (1)高い研究レベルに裏打ちされた「知の蓄積と発信」
 - (2)国際的リーダーとなる人材の輩出
 - (3)国際的な連携の構築であるとする。

- 筑波大学は、急速にグローバル化が進む世界情勢のなかで、世界をリードする研究型大学としての使命を果たすために、未来を切り拓く知の創造を通じて、地球規模課題に対する解決策を提示することを目指す。

附属学校における取組

「国際化対応能力を培う国際教育拠点」をかがげ、各校の特色を生かした国際教育を推進

国際化対応能力を培う

国際教育拠点

附属の共通コンセプト

- 幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて、自国や他国の文化を理解し、大切にする態度を養うとともに、積極的に外国の人とコミュニケーションをとる態度を養う。
- 教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の国際化を図り、附属として日本や世界のために出来ることを考える。

各校の特色を生かした人材育成

【小中高】

小中高での全人教育を通して、世界をも視野に入れた多様な社会で活躍できるように、確かな教科教育、多彩な学校行事や児童生徒の諸活動に裏打ちされた自主的・自律的・自由な人材を育成する。

【駒場】

トップリーダー育成の一助として国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材育成を図る。

【坂戸】

総合学科ならではの多角的な国際教育を通し、持続発展可能な社会の実現に向け、地球的課題に対し主体的に考察・行動できる人材を育成する。

【視覚】

国際交流等により国際性を身に付けた人材を育成する。

【聴覚】

国際交流でのコミュニケーションを通し、異文化を理解する人材を育成する。また日本語のみならず、海外の言葉にも興味・関心持つ人材を育成する。

【大塚】

外国の人と共に活動し、仲良く楽しむことができる。外国の人とのふれあいを通してスムーズに交流できる。

【桐が丘】

国際交流の経験を糧に、国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲のある児童・生徒を育成する。

【久里浜】

子どもの興味関心に応じた触れあいから、外国や外国人について親しみをもち、相手を知ろうとする気持ちを育む。

3. 共通コンセプトに基づく 附属学校の国際教育の取り組み等

		小学校	中学校	高校	駒場中・高校	坂戸高校
共通コンセプト		幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて、自国や他国の文化を理解し、大切にすることを養うとともに、積極的に教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の国際化を図り、附属として日本や世界のために				
各校の国際教育の目標 (国際教育を通じて育成する生徒像)		各校の特色を生かし				
		・小中高での全人教育を通して、世界をも視野に入れた多様な社会で活躍できるように、確かな教科教育、多彩な学校行事や児童生徒の諸活動に裏打ちされた自主的・自律的・自由な人材を育成する。		トップリーパー育成の一助として国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材育成を図る。		総合学科ならではの多角的な国際教育を通じ、持続可能な社会の実現に向け、地球的課題に対し、主体的に考察・行動できる人材を育成する。
(国際教育を通じて広がる教師力)		・諸外国の児童・生徒の実態、教育事情を実際に体験することで、世界に誇ることができる日本の教育の特色(長・短を含む)を再認識することができる。 ・プレゼンテーション能力を向上することができる。	・現地の授業・生活を直接体験することで、教師に求められる指導力や指導の方法が国によって異なったり、国を越えて共通していたりすることを理解する。又教師自身が他国との交流を通じて国際社会の現状の一端を実感する。	・教師の語学力向上を図るとともに、他国の文化を尊重できる国際的な感覚を身に付ける。 ・日本の文化を他国の人々に紹介できるスキルを高める。	・教師の語学力を高めるのみならず、海外との交流を通じて異文化理解を深める。	・教科の枠を超えた協働により、教師それぞれが持つ知見を活かしながら、地球的課題を意識した教育を行う力を身につける。
(国際貢献)		・国内へ発信している教育成果を海外教育技術支援へ活用。	・国内各地へ発信している教育技術や、教師教育の成果を海外の先生方とも共有する。	・国内へ発信している教育成果を、海外へも発信する。	・海外、とりわけアジア諸国の学校の生徒と研究発表を行うことでお互い切磋琢磨することができる。同時に文化的な交流をし、お互いの理解に貢献する。	・本校との協働を通して、アジアの各校に対して本校とともに持続発展可能な社会のあり方について考える機会を与える。
取組 (30年度)	幼児児童生徒	・ハワイ大学附属小学校、附属高等学校との児童交流会、親子20組参加 ・同時期にワイキキ小学校との交流会も実施 ・北欧授業交流(デンマーク、リンビートーベック市との提携による授業研究会、スイスの教師教育大学との授業研究交流会) ・筑波大学外国人留学生との交流会	・シンガポール、ホアチオン校からの留学生との交流会 ・Junior Global Loadersへ参加 ・JICA研修員(ザンビアより)を外部講師とする授業 ・アメリカ短期留学(Faith Christian Academy)に36名が参加 ・シンガポール、ホアチオン校へ短期留学(春休み 2名)	・日中交流ホームステイ受け入れ 10名 ・国際学術シンポジウム(韓国)に生徒派遣3名 ・プリンスエドワード アイランド大学へ生徒派遣16名 ・国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム派遣準備(31年度派遣生徒決定) ・日中高校生交流(北京)生徒派遣10名 ・シンガポール、ホアチオン校から9名来校、交流 ・SGH全国高校生フォーラム参加	・筑波大学外国人留学生との交流(授業参観・音楽祭・文化祭訪問) ・ACCU「インド教職員招へいプログラム」10月9日(火) 訪問者:インド教職員15名 授業見学他 ・台中一中訪問 2018年12月11日(火)～16(日) (高1・4名、高2・12名) 理数を中心とした研究発表交流 ・タイ国際科学フェア2019(TISF)、2019年1月7-12日(Mahidol Wittayanusorn School, Thailand)(3名) ・釜山国際高校、本校訪問1月15日(高校生10名) ・釜山国際高校訪問 3月25日～29日(高1・7名、高2・5名)発表活動・文化交流他	・AIMS留学生34名と交流 ・JSTさくらサイエンスプログラム・インドネシア高校生受け入れ ・「国際フィールドワーク」実施、生徒7名 ・姉妹校、コルニタ高校訪問 ・「国際フィールドワーク入門」実施 生徒23名 ・第2回日本インドネシア高校生SDGsミーティング9名の生徒が参加 ・SGH事業「高校生国際シンポジウム・全国SGH校生徒成果発表会」本校生徒による企画・運営実施 ・インドネシア・アルファセンタウリ高校生22名、教員4名が来校・交流 ・フィリピン大学附属高校来日、生徒交流

視覚特別支援学校	聴覚特別支援学校	大塚特別支援学校	桐が丘特別支援学校	久里浜特別支援学校
外国の人とコミュニケーションをとる態度を養う。 出来ることを考える。				
た国際教育の取組				
国際交流により国際性を身に付けた人材を育成する。	国際交流でのコミュニケーションを通じ、異文化を理解する人材を育成する。	外国の人と共に活動し、仲良く楽しむことができる。 外国の人とのふれあいを通してスムーズに交流できる。	国際交流の経験を基に、国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲、また、その実践の場を校外にも求める主体性のある児童生徒を育成する。	子どもの興味関心に応じた触れ合いから、外国や外国の人について親しみを持ち、相手を知ろうとする気持ちを育む。
・外国文化の研鑽を深める機会となる。 ・国際教育を通じて、グローバルな視野、コミュニケーション能力を身に付ける。	・教師自身の視野を広め、語学力の向上を図る。そして聴覚障害教育の国際教育拠点の学校として、海外に発信できる力を身に付ける。	・外国文化の研鑽を深める機会となる。 ・国際教育を通じて、グローバルな視野、コミュニケーション能力を身に付ける。 ・日本の文化を他国の人々に紹介できるスキルを高める。	・国際教育を推進する過程を通して、他国教師らとの間に信頼関係を築き、人的ネットワークを広げていくとする。 ・国際感覚・国際コミュニケーション能力を身に付ける。	・教師のコミュニケーション能力を向上させ、新しい知識や技能を身に付けるきっかけとする。
・アジア諸国の視覚障害教育発展に寄与。 ・アジア諸国の視覚障害者職業自立推進に寄与。	・聴覚障害教育における指導法や教材教具の有効活用を具体的に国外の教育現場に提供する。特にフランスやアジア諸国に発信する。	・知的障害児教育に関する指導法や教材教具の紹介。 ・海外からの研修生の受け入れおよび授業研究の協力	・我が国の肢体不自由教育が培ってきた知見・技術等を他国の教育関係機関に向けて発信する。	・自閉症児教育に関わる海外の特別支援学校関係への成果発信。
・フィリピン国立盲学校からの生徒訪問受け入れと交流 ・台北市啓明学校 学校見学受け入れと授業交流 ・韓国視覚障害者連合会からの見学受け入れと交流 ・トビタテ！留学JAPANのプログラムでタイ視覚障害者支援クリスチャン財団の盲学校で留学、交流とホームステイなど 高等部生徒 4 名	・ソウル聾学校教員生徒 26 名来校、国際交流協定締結調印式および交流会開催、 ・國立臺南大學附屬啟聰學校 校長 他 5 名参観受け入れ ・ロシア・ニジニヴゴロド特別支援学校教員 5 名生徒 3 名交流、参観受け入れ ・高等部専攻科台湾研修旅行実施、臺北市立啟聰學校と交流 ・韓国ソウル聾学校とのスカイ交流	・中国北京市健翔学校生徒・保護者・教師が来校。中学部生徒と交流 ・給食で海外の料理を体験：「オリバラ給食デー」の実施 ・中学部における ALT の教員による英語の授業の実施	・台湾 国立南投特殊教育学校、国立和美実験学校へ訪問 生徒 1 名 ・韓国 広州セロム学校へ訪問 生徒 1 名 ・海外渡航した生徒代表による台湾・韓国国際交流報告会 ・台湾 国立和美実験学校とのネットワーク回線を用いた授業交流 ・韓国 広州セロム学校とのネットワーク回線を用いた授業交流 ・IOC Youth Summit への参加 生徒 2 名 ・筑波大学外国人教員研修留学生 7 名（インド 1 名、モンゴル 1 名、ブラジル 1 名、ペルー 1 名、クロアチア 1 名、マラウイ 1 名、ナイジェリア 1 名）と高等部生徒との国際交流	・海外からの見学者との交流多数 （中国広西幼児師範高等专科学校、中国 廈門市特殊教育関係者、中国北京の研究者視察団、中国湖北省教育庁特殊教育研修団、JICA 横浜：マレーシア、韓国国立特殊教育院）

		小学校	中学校	高校	駒場中・高校	坂戸高校
取組 (30年度)	教師国際 貢献含	<ul style="list-style-type: none"> ・米国オークランド大学より参観 音楽の研究協力による受け入れ ・日韓授業技術交流会参加 韓国と日本とそれぞれの国で開催 ・北欧授業交流（デンマーク、スイス）に12名の職員が参加参加 ・韓国の他の地域から研修生受け入れ ・筑波大学外国人留学生との交流会実施 ・中国からの研修生受け入れ ・台湾師範大学の教員の参観受入 	<ul style="list-style-type: none"> ・北京市建華実験学校の教員の参観・意見交換会（6名来校） ・研究協議会に韓国の理科教員40名参加（一般申込にて） 	<ul style="list-style-type: none"> ・日中交流ホームスティ10名受け入れ ・シンガポール、ホアチョン校から9名来校、交流 ・SGH全国高校生フォーラム参加 ・日中交流最終報告会発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・筑波大学外国人教員研修留学生訪問研修、12名受け入れ・校内案内 ・ACCU「インド教職員招へいプログラム」10月9日（火）訪問者：インド教職員15名 受け入れ、案内 ・台中一中訪問 2018年12月11日（火）～16（日）（引率3名） ・タイ国際科学フェア2019（TISF）、2019年1月7-12日（引率教員1名） 釜山国際高校、本校訪問 1月15日（高校生10名） 生徒受け入れ案内 ・釜山国際高校訪問 3月25日～29日（引率3名） 	<ul style="list-style-type: none"> ・韓国ユネスコ国内委員会招聘事業で教員1名、韓国へ派遣 ・台湾復興実験高級中学からの見学受け入れ ・韓国「政府日本教職員招聘プログラム」に1名参加 ・京畿外国語高等学校生徒40名、教員5名受け入れ ・「国際フィールドワーク」インドネシアにて実施 ・留学生3名（タイ、台湾、デンマーク）受け入れ ・「国際フィールドワーク入門」実施 ・「高校生国際シンポジウム・SGH校生徒成果発表会」実施 ・フィリピン大学附属高等学校来日、「インターナショナルプログラム」実施 ・タイ・カセサート大学附属高校カンペンセン校舎 教員2名訪問・研究協議
環境整備	現状	<ul style="list-style-type: none"> ・多目的教室「未来の教室」の設置。 	<ul style="list-style-type: none"> ・英語が話せる者が常駐し、生徒が自由に活用できるイングリッシュルームの設置。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウェブ会議のシステム。 	<ul style="list-style-type: none"> ・高度情報化事業に伴い、スカイプなど利用して海外派遣先の生徒と校内残留生徒との交流を検討中。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スカイプ。 ・多目的交流棟の設置。
将来構想		<ul style="list-style-type: none"> ・英語専科教員の増員（小学1年生からの英語教育導入のため）。 ・継続的な財政的基盤を得て、渡航費・通訳費の確保をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ALTとのチームティーチングを中心に、少人数での授業を展開する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウェブ会議のシステム。 ・実習生・留学生等の受け入れのための宿泊施設。 ・本校生徒の海外留学、海外からの留学生受け入れのための奨学金制度。 	<ul style="list-style-type: none"> ・海外派遣で交流の確立している相手校とテレビ会議等で交流を定期的に行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・校内Wifiの整備を行い、日常的に海外の学校と学びあえるようにする。 ・アセアンを中心にアジアの高校生向けの奨学金制度を創設し、坂戸高校で日本語学習を実施し、筑波大学に入学できるようにする。

視覚特別支援学校	聴覚特別支援学校	大塚特別支援学校	桐が丘特別支援学校	久里浜特別支援学校
<ul style="list-style-type: none"> ・ミャンマー社会福祉大臣他 7 名の鍼灸科見学受け入れ ・ドイツ・ハンブルグ大学からの教員の学校見学・授業交流 ・タイ視覚障害者支援クリスチャン財団の盲学校教員同士の交流及び授業視察 	<ul style="list-style-type: none"> ・ソウル聾学校教員生徒 26 名来校、国際交流協定締結調印式および交流会開催 ・中国・アモイ市特殊教育関係者 12 名参観受け入れ ・國立臺南大學附屬啟聰學校学校長他 5 名参観受け入れ ・「海外特別セミナー」マレーシア研修に教員 2 名を派遣 ・アメリカ手話通訳者 2 名参観受け入れ ・スウェーデン・小児難聴及びその家族のハビリテーションセンター長見学受け入れ ・ロシア・ニジニノヴゴロド特別支援学校教員 5 名生徒 3 名交流、参観受け入れ ・筑波大学ドイツ学術交流会パートナーシップ・プログラムに教員 4 名を派遣 ・カナダろう学校長、フィリピンろう連盟関係者 1 名参観受け入れ ・高等部専攻科台湾研修旅行実施、臺北市立啟聰學校と交流 ・香港教育大学教授 1 名、香港現職教員 10 名参観受け入れ ・韓国国立ソウル聾学校、私立サムソン聾学校訪問研修に教員 4 名派遣 	<ul style="list-style-type: none"> ・インドネシア教育大学関係者 4 名の視察受け入れ ・ラオス特別支援教育関係者の視察の受け入れ ・オハイオ州立大学関係者視察受け入れ ・インドネシアチパガンディ特別支援学校教諭 2 名が本校の授業研究会に参加 ・香港教育大学 7 名視察 	<ul style="list-style-type: none"> ・中国廈門市日本特別支援教育使節団（12 名）の受け入れ ・香港 NAAC からの視察団（教育・福祉関係者 32 名）の受け入れ ・香港教育大学からの視察団（7 名）の受け入れ 	<ul style="list-style-type: none"> ・中国廈門市日本特別支援教育視察団 12 名を受入れ研修 ・アメリカ TEACCH センターの FITT 研修に教職員 3 名を派遣 ・多くの見学を受け入れている（中国広西幼児師範高等専科学校、中国 廈門市特殊教育関係者、中国北京の研究者視察団、中国湖北省教育庁特殊教育研修団、JICA 横浜：マレーシア、韓国国立特殊教育院）
・スカイプ。	・筑波大学内のウェブ会議システム。	・スカイプを活用した実践。 ・教材・教具の展示	・ウェブ会議システム。	・ウェブ会議のシステム。 ・図書館に海外絵本コーナーを設置。
<ul style="list-style-type: none"> ・校内各所からの国際電話。 ・留学生支援の充実。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学外へも公開できる「国際コミュニケーションルーム」の開設。 ・常設展と巡回展を行う。常設展には姉妹校のパリ聾学校・フランス関係の展示や児童生徒の調べ学習成果物・海外の絵本展示を行う。また巡回展として、11 附属巡回展のようなスタイルでの海外の衣食住、教育について紹介するスペースをつくりたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・継続的な教員の海外派遣交流視察、研修の機会の設定。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウェブ会議システムを活用した授業交流、情報交換を一層充実させる。 ・海外への教員派遣を拡充し、研究成果等の対外発信力を強化する。 ・北欧等の特別支援学校との交流を実現させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・海外からの講師招聘型研修会を定例化すると共に、内容を録画編集し、国内外に向けた研修データライブラリーを整備する。 ・テレビ会議等のシステムを利用して、定期的に授業研究会等を行う。

4. 各附属学校の国際教育活動

附属小学校

先進的教育技術交流・児童の国際交流をめざして

1. 本校の国際教育の特徴

筑波大学附属小学校（以下「本校」）は、国内の教育研究校としての使命、責任感をもって教育研究を進めている。その成果を生かして、海外教育技術支援、海外教育技術交流を行い、相互の教育技術の高まりをめざし、国際教育を推進している。

本年度も、グローバル化を研究の一つの核として、組織的に取り組んできた。まず、本校の研究を推進する研究企画部が中心となり、①海外校との授業交流、②児童の海外交流、③児童の国際理解環境の充実の3本を柱にして、各担当役割を組織し、研究を進めてきた。グローバル化の実現のためには、全校をあげての組織的、かつ長期的な継続を視野にした研究を進めることが必要だと感じ、幅広い教員の参加をめざしている。また、国際支援の観点でのJICA 事業協力、プログラミング的思考講習も行った。

- | | |
|----------------|---------------------------------|
| ① 海外校との授業交流 | 韓国との相互訪問における授業交流、北欧授業交流 |
| ② 児童の海外交流 | ハワイ大学、ハワイ大学附属小学校・附属高校、ワイキキ小学校交流 |
| ③ 児童の国際理解環境の充実 | 留学生との交流 低学年からの英語活動 韓国の先生方の訪日授業 |
| ④ 国際支援 | インドネシアプログラミング的思考講習 JICA 研修員受け入れ |



【ハワイ大学附属高校との交流】

① 海外との授業交流

○日韓授業交流

- 1 日 時 10月8日（月）～12日（金）
- 2 訪問場所 水原市 新豊初等学校
光州広域市 松源初等学校
昌原市 安民初等学校
- 3 参加教員 山下真一（社会）青山由紀（国語）
眞栄里耕太（体育）笠原壮史（音楽）



【本校教員による社会科授業】

「日韓授業交流研究会」は、海外交流の一環として開始し、本年度で11回目を迎える。韓国では、水原市新豊初等学校、光州広域市松源初等学校、昌原市安民初等学校の3校を訪れ、現地校の教師による算数科の授業を参観した。また、本校教員が現地の子どもに国語、社会、体育、音楽の授業を行った。各会場では、講演・模擬授業を実施し、両国の教師が教育や授業論全般について意見交換、初等中等教育における諸問題について話し合いを行った。発足当初は算数や理科などを中心に行っていたが、最近では、全教科を通じて交流授業を行っている。国の違いはあるが、教育に携わる多くの人との交流を通して世界を広げる貴重な経験ができた海外研修であった。

（1）10月9日（火） 水原市新豊初等学校

10月9日は、子どもたちは祝日のため休みであったので、京畿道地域（ソウル周辺）の韓国授業技術研究会の教師と授業交流会を行った。学校が始まる前日であったが200名を超える韓国の教師が集まって研究会に参加した。

午前は、登校の体育館で韓国の教師の算数の模擬授業を2つ参観させていただいた。その後、2つの授業に対して協議を行った。午後は、本校教師山下が社会、眞栄里が体育、笠原が音楽の授業を韓国の教師に対して模擬授業を行った。

（2）10月10日（水） 光州広域市松源初等学校

まず朝のクラブ活動を参観した。韓国の伝統的な踊りやブラスバンドの演奏を鑑賞した。当校では、1週間に1度、子どもたちが内容を選択してクラブ活動を行っている。日本とは違って外部からの協力者の支援を受けて、その活動に取り組んでいる。

1～2時間目は全クラスの授業を参観した。教科は多種多様にわたるものだった。どの授業も問題解決学習やICTを活用した授業を行っていたのが印象的だった。韓国の教育では、思考力に力を入れているのだという。黒板には、授業内容、学習問題などのマグネットも用意されており、それに対する取り組みがうかがわれた。3時間目は、青山が教室で国語の授業、4時間目は眞栄里が体育館で体育の授業、5時間目は、山下の社会の授業を教室で行った。授業後は、協議会を行った。



【本校教員による国語科授業】



【本校教員による体育科授業】

(3) 10月11日(木) 昌原市安民初等学校

昌原市の授業研究会に参加する形であった。授業研究会のためにここでも200名以上の参観者が訪れ、盛大な研究会であった。当日は、所用のため教育長は不在であったが、教育委員会の指導主事が多数参加した。



【韓国教師による算数科授業】



【本校教師による音楽科授業】

午前は、当校の教師が算数の公開授業を行った。その後、会議室にて研究協議会を行った。本校教員も講評という形で協議会に参加し、授業技術の支援を行った。お昼は全校と同様、給食を試食した。そして、学校内の施設、教育機器などを見て回った。

午後は、笠原が音楽の授業、青山が国語の授業を体育館で行った。2つの授業の研究協議の後、山下が教育長から依頼されていた「思考力」「問題解決学習」にかかわる講演を行った。

○デンマーク、スイス 授業交流 10月7日～14日

(算数) 田中博史 夏坂哲志 山本良和 盛山隆雄 中田寿幸 大野桂 森本隆史

(理科) 佐々木昭弘 鷲見辰美 辻健 (国語) 桂聖 白坂洋一 (体育) 齋藤直人

デンマークとスイスの子供たちに理科と算数の授業を行った。理科は、食塩の濃度差を使った水の色分けに挑戦した。算数は、多面体展開を考える授業で、協議会も行う。算数、理科、体育、国語のワークショップも行い、多くの現地の先生方と有意義な時間を過ごした。



【デンマークでの公開研究授業、ワークショップ】

② 児童の海外交流

◆ハワイでは初めてのオリジナルプログラム

これまで本校では、サンフランシスコでの交流会を行ってきたが、昨年度ハワイ大学の STEMS² のプログラム参加したことに端を発し、今年度は本校独自の交流プログラム作成と実施にトライした。交流会は夏休み最後の週に行い、4年生20名が参加、5名の教師が引率した。

○ハワイ大学、ハワイ大学附属小学校、附属高校、公立ワイキキ小学校との交流

日本から用意していった、アメリカの友達に紹介したい「日本文化6選」をグループに分かれてデモンストレーション、そして一緒に遊ぶ活動を行った。ハワイ大学附属小の子どもたちは6年生56名。56名を6つのグループに分け、20分ずつそれぞれの日本文化に触れられるようにした。日本の子どもたちにしてみれば、20分×6回のデモンストレーションを行うことになる。

英語を使っのデモンストレーション。1～2回目は、緊張もあって声も小さく自信がないようにも見受けられたが、次第に慣れていき笑顔があちこちで生まれるようになった。回数をこなすことは大切なことであると改めて感じた。ワイキキ小学校でも同様のプログラムを行った。

日本文化のデモンストレーションは、ハワイ大学附属の高校生に対しても行われたが、高校生の方から積極的に握手を求めたり、別れ際にハグをしてくれたり、スキンシップも多く見られ、年齢の離れた者同士の交流も意義深く感じられた。ハワイ大学では、大学生によるキャンパスツアーや、高校生と一緒にフラダンスの授業を受けるなどのプログラムも行った。



【ハワイ大学附属での日本文化デモンストレーションの様子】

2018 年度 国際教育事業について

1. アメリカ・ペンシルベニアへの短期留学 2017 年度末実施報告

本校では、春休み期間中にアメリカへの短期留学の機会を設けている。行き先はペンシルベニア州セラーズビルである。毎年多くの希望者がいる中、選抜された2・3年生計36名が参加した。現地では Faith Christian Academy の授業に参加し、近隣の家庭でホームステイをした。教員の引率は、全日程を1名が、前半と後半に分けて2名の延べ3名が引率した。

現地での日程は以下の通りである。

- 3月19日(月) (日本時間) 15:00 集合 17:55 成田出発
(現地時間) 16:45 Newark (NJ) 到着
バスで Sellersville, PA へ
20:10 Faith Christian Academy 着
校内チャペルでホストファミリーと会い、各家庭へ
- 3月20日(火) チャペル集合。FCA 生徒は試験中のため、美術の特別授業
チャペルに戻り、3年廣瀬が挨拶スピーチ
マッチングされた各 Ambassador (大使=パディ)
と授業へ
Ambassadors は7～11年生(事前に伝えた英検の級などを参考に組んでくれた)
14:00 雪のため授業中止、繰り上げ下校
- 3月21日(水) 予定: Ambassadors と授業に出席 (0810-0820 に HR、0825 I 限開始 1505 IX 限終了)
～22日(木) 送迎はホストファミリー/カープール/スクールバスのいずれか
実際: 大雪のため休校、ファミリーと過ごす



- 3月23日(金) Ⅸ時間目まで通常授業→美術室で Ambassador へ Thank you カード作成
→ここまでの経験の Sharing →チャペル外で集合写真撮影
→体育館で自由時間 (バスケや折り紙など)
17:45 ピザパーティ Ambassador と 18:30 チャペルで Farewell Party リハーサル
19:00 ~ Farewell Party ホストファミリー、Ambassadors、教職員と
- 3月24日(土) ~ 25日(日) ファミリーと過ごす
- 3月26日(月) フィラデルフィア観光
自由の鐘・独立記念館→Constitution Centerで昼食→バーンズコレクション(美術館)
→バスで Newark (NJ) へ →18:00 ホテル泊
- 3月27日(火) 7:00 集合 11:00 Newark (NJ) 出発
- 3月28日(水) 13:15 成田到着 14:00 過ぎ解散

【学校生活】

学校では、生徒1人1人に ambassador と呼ばれるお世話係の FCA 生が終日付き添い、ambassador の出る授業全てに本校生徒が参加させてもらうことができる。初めは不安そうな生徒も、最後にはどこにいるのかすぐには見つけられないほど学校に馴染むことができていた。生徒たちのたくましさと、受け入れ校の丁寧かつ温かい対応に感謝の念が尽きない。今年は、降雪により学校が閉鎖されたため、実際に授業に参加できたのは2日間のみであったが、「授業がわからなくてつらすぎる」という声はなかった。



ランチタイム



【ホームステイ】

各々がホストファミリーとも忘れがたい特別な時間を過ごせたようだ。特に今年はファミリーと共に過ごす時間が長く、満足度が高かった。週末には一緒に近郊の観光地に出かけ、中にはファミリーの誕生日を共に祝った家庭もあった。家庭で過ごしホストファミリーと話す時間が長かったせいか、Speaking に慣れるタイミングが例年より早く、姿勢もより積極的に感じた。言語や文化の違いを越えた人の温かさに触れ、多くの生徒とファミリーが別れ際に涙する姿が印象的だった。



【Farewell Party】

最終日のお別れ会ではダンスやクイズなどの出し物を披露し、合唱曲の Joyful Joyful ! を全員で歌うことでお世話になったお礼を伝えることができた。



【生徒の変容】

この短期留学は、異なる文化や習慣を学ぶと同時に、自分たちの文化についても改めて考える機会となっている。また、英語を使って何かを伝えようとする前向きな姿勢が確実に養われている。そのことは、以下の生徒のコメントから推察できる。

- ・今までは英語で話す時は、発音のよさ格好のよさを意識し人前で話すのが恥ずかしかったが、今回で当たり前になり自信を持てた上に、英語でコミュニケーションをとる方法を学んだ。
- ・きちんと自分が思っていることを相手に伝えられるようになった。
- ・話題を探すのが上手になった。
- ・今までは頭の中で何となく組み立ててから話していたし、間違えたらどうしようという気持ちも少なからずあったけれど、間違いを恐れず積極的に話しかけるようになった。
- ・ホストファミリーとの生活を通して自立した。

第7回の参加者も秋から事前学習を重ねているので、この短期留学が本校の国際理解に対する良い流れを引き継ぎ、さらに良いものになっていくよう、筑波大学と協力をしていきたい。

2. Hwa Chong Institution との短期交換留学

① 附属中学校からの短期留学

2018年3月25日から4月3日に短期留学が行われた。留学先はシンガポールにあるホワチョン校である。附属中の生徒が2名、附属高の生徒が6名の計8名が参加した。



シンガポールの空港に降り立つとホストファミリーの方々が迎えに来てくれていた。初めてバディと顔を合わせた生徒たちは、慣れない英語でも一生懸命に会話をする姿が見られた。始めは附属生もホアチョン校の生徒も表情が少し硬かったが、すぐに和らぎ、ホストファミリーのもとに向かっていった。

翌日以降は、ホスト生徒と共に授業を受け、英語で行われる授業に参加したり、食堂で初めて見る食べ物を楽しんだりしており、生徒はシンガポールでの生活を満喫していた。プログラムには、NUS（シンガポール国立大学）訪問、Discovery Center、Army Museum 見学、National Garden 見学も含まれ、貸し切りバスでの案内や引率もしてもらった。さらに、同時期に短期留学していた関西大学高等部の皆さんと三校合同の学校紹介プレゼンテーションを行うなど、様々な活動を行った。生徒達は慣れない環境とシングリッシュ（シンガポール独特の英語）に苦戦しながらも、意欲的に学ぶHWACHONG校の生徒の姿勢に刺激を受け、多民族国家のシンガポールを様々な角度から体感する機会に恵まれた。



② 来日した HCI 生徒との交流会

春休みに附属中高生を受け入れてくれたホスト生徒が来日した。留学生は主に附属高校で授業を受けるのであるが、そのプログラムの合間を縫って、9名の留学生が附属中を訪問した。交流会準備小委員会が主催した交流会（5月31日）は、会場の図書館がいっぱいになるほどの参加者で、フレンドリーな留学生の皆さんとトランプやけん玉などのゲームをしながら、会話を楽しんだ。

3. 生徒・保護者・外来者へのアピール

- ① シンガポール交換留学とアメリカ留学に参加した生徒たちが報告ポスターを作成し、始業式からの約一ヶ月間は1階廊下に掲示した。ポスターを立ち止まって見る生徒も多く、ポスターを見て様子を知ること、今年度、アメリカ、シンガポール留学に応募した生徒もいた。
- ② アメリカ留学に2年生で参加した生徒が、3年進級直後の4月に活動報告を行った。本人のまとめとなり、また学年全体へのよい刺激となった。
- ③ アメリカ留学プログラムの説明会に出席し、体験から学んだことや次の参加者へのメッセージを写真と共に発表した。説明会終了後には、個別に生徒や保護者からの細かい質問にも答えてくれる姿も見られた。
- ④ 今年度参加する生徒たちの事前学習に参加し、実際の体験からの学校生活やホームステイ先で注意すること等のアドバイスをを行った。このような活動に参加することで、自身の体験をふり返ることができ、見聞きしたことの意味を考えることもできた。
- ⑤ PTA 会報では、昨年度引率した教員が写真とともにシンガポール留学、アメリカ留学の報告を行っており、学校全体への周知を深めた。さらに積極的な発信を心がけていきたい。

4. 教員・生徒の国際交流

海外から

11月：

- ① 北京の私立小中高一貫校より教員6名の参観・訪問。参観者と、一部の生徒が中国語や英語で交流を行った。

【教師について】

2時間目の参観は、英語で校内を案内した。3時間目は質疑応答を行った。相手校より、教育理念・環境・生徒の状況や学校生活の概略についての説明を英語及び日本語で受けた。その後、意見交換を行った。先方からは、附属中学校や附属高校がめざましい教育成果をあげていることに対して、その理由についての質問が行われた。また、心の教育、道徳教育やカウンセラー等については、現在の中国ではあまり積極的な教育が行われていないが、将来必要になるので本校の状況を説明してほしいという依頼があった。当方からは、教師の働き方や学校の制度についての質問を行った。

- ② 研究協議会を韓国の中学校教員約40名が参観。一般申込にて。理科の授業を参観。協議会にも出席した。



2月：

3年総合Iコースにて

世界で起こっている貧困、飢餓、紛争、環境破壊、人権侵害などによって弱い立場に追いやられている人について考える活動を行った。外部団体の講師も来校した。この講座は昨年からの続きであるが、今年はザンビアの Linda Mususu (JICA 研修員) 氏が来校し、講師を務めた。



いずれの参観においても、担当係のみでなく、多くの教員が対応できており、国際交流や授業公開が特別なことではなくなっている。

グローバル人材の育成を目指して

1. 本校の国際教育の特徴

2014年度から、スーパーグローバルハイスクール（SGH校）としての取り組みが始まり、4年目を迎えた。本校は、専門性と教養、問題解決能力、コミュニケーション能力とプレゼンテーション能力、主体性と協調性、異文化理解の柔軟性と日本人としてのアイデンティティを備える「グローバル・シチズン」の育成と、それらに加えて高い語学力、議論する力、地球規模の視点を有する「グローバル・リーダー」の育成を目指している。今年度も、昨年度に引き続き「グローバル・リーダーの育成」を中心に取り組んできた。

2. 活動の具体

（1）第12回アジア太平洋青少年リーダーズサミット（APYLS）

シンガポールにある Hwa Chong Institution（ホワチョン校）主催の第12回 Asia-Pacific Young Leaders Summit（APYLS）が7月21日から28日の日程で開催された。今年度の全体テーマは IGNITE: Rekindling Our Dreams（夢の再燃）の下、英国、仏国、南アフリカ、インド、インドネシア、シンガポール、マレーシア、オーストラリア、フィリピン、中国、韓国、日本の13ヵ国79名が参加した。日本からは筑波大学附属高校2年生の男子1名、女子1名と麻布高校2年生の男子3名の合計6人が参加した。



APYLSは、将来を担う若者たちの国際交流・友好関係の構築、国際問題の認識と解決を模索することをねらいとして、2006年からホワチョン校が始めた国際交流事業である。本校は第1回から生徒を派遣している。大会期間中、参加生徒は他国の学生と4人から6人の相部屋で共同寮生活を送りながら個人的ネットワークを築く。

プログラムには、参加者同士のつながりを強くするためのチームビルディング活動、そしてシンガポール大統領府、外務省をはじめ、各種機関等への訪問があった。プログラムのハイライトは3つある。Poster Session, Summit DialogueそしてStudent Dialogueである。

Poster Sessionは初日の夜に開催された。全体テーマを3分野に分けて、各国がポスター発表をした。ポスター発表の内容は、翌日から始まるStudent Dialogueの内容の概要を伝えるものである。彼らの最大のモチベーションは、各分野で1位となったチームが翌日の大統領府で直接大統領に発表をする機会が与えられる点だ。結果、日本が賞を取ることができ、翌日の練習に磨きをかけた。大統領府では生徒たちのキーワードの「生きがい」に大統領が興味を示してくださり、通常5分間のところを倍の10分間も日本の発表に時間を割いてくださった。

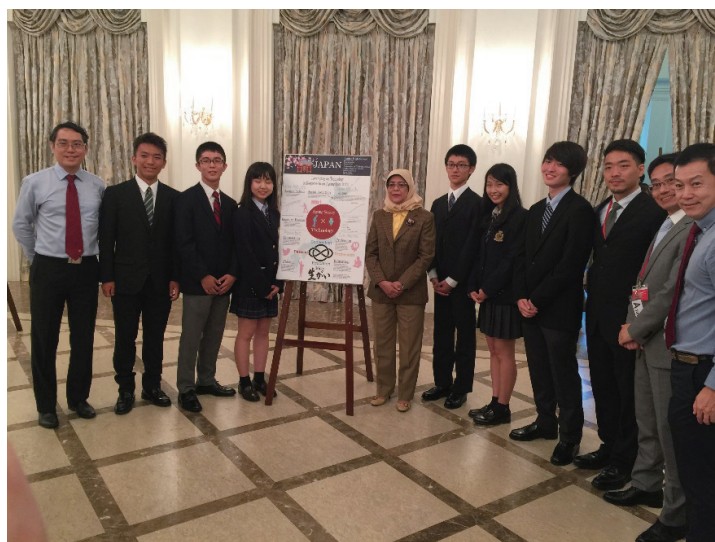
Summit Dialogueではホスト国であるシンガポールの政・財・教育界を代表する方々の講演を聴き、世界の動向に対する理解を深めた。質疑応答では、日本代表の生徒たちは積極的に挙手をして質問をし、議論に参加した。

Student Dialogueでは、事前に各国代表者に与えられた国際問題の課題が与えられ、課題の調査研

究をもとに解決策を提案するという20分間のプレゼンテーションを行う。日本に与えられたテーマは、「Leveraging on Technology in response to an Ageing Population (高齢化社会に対するテクノロジーの応用)」であった。日本代表の6名は「生きがい」を軸に自分たちの解決策を提案した。その後の質疑応答では、参加者たちからの質問に答えていた。

閉会式では、各国がステージで文化発表を披露し、日本は「よさこいソーラン節」で式を盛り上げた。参加者全員が、すべてのプログラムを

やり終えた達成感と感動で涙を流している姿が印象的であった。翌日、将来リーダーとして世界で活躍するために取り組むべき課題をそれぞれの胸に刻み、帰国の途についた。



大統領にポスター説明



日本チームの発表1



日本チームの発表2

(2) 国際学術シンポジウム (IAS)

7月23日から27日までの5日間、本校生徒3人（小野緋万里さん、田丸真帆さん、宝地戸海羽さん）が韓国・ソウルにあるハナ高校を訪れ、第9回国際シンポジウムに参加した。このシンポジウムは毎年ハナ高校が主催しているもので、今年度はハナ高校の学生190人とアジア数カ国（日本、中国、香港、タイ）からの高校生93人が参加した。

プログラムのメインイベントは3人1チームで行うプレゼンテーションである。参加者は、今年度の共通テーマ

（“Strategies for International Cooperation”）に関する研究論文を提出し、その内容を英語で発表した。プレゼンテーション後は、パネリストや聴衆からの質問にもすべて英語で答え、議論を深めた。

本校チームの小野さん、田丸さん、宝地戸さんは、“How can high school students save Cambodi-



an teenagers?” というテーマで、SNS を通じた国際協力プロジェクトを提案するプレゼンテーションを行った。

プレゼンテーションのほかにも、ミニ・オリンピックやソウル探検、各国の文化的パフォーマンス等のイベントを通じて、アジア諸国の学生と親睦を深め

た。また、5日間のうち4日間はハナ高校の学生寮に滞在し、最後の1日はハナ高校生のお宅でホームステイを行った。英語での国際交流に加え、韓国の文化に触れるという貴重な経験を行うことができ、多くの知的刺激を受けた5日間であった。



(3) UPEI 研修 (プリンスエドワード島大学研修)

スーパーグローバルハイスクール指定を受け、本稿では APYLS に 3 名、IAS に 3 名、シンガポールの Hwa Chong Institution との短期留学に 6 名、日中交流に 20 名を海外に派遣しているが、国際交流や海外研修の希望者が多く、それらの生徒の希望を生かすために 16 名をカナダ・プリンスエドワード島大学 (UPEI) に送り、研修を経験させるというプログラムが本年度で 3 年目である。



講義を受けた大学の建物



授業の様子

2018 年 8 月 11 日 (土) から 26 日 (日) までカナダ東部のプリンスエドワード島大学で SGH プログラム研修が行われ、本校 1 年生 15 名、2 年生 1 名が参加した。ホームステイをしながら、午前中は大学の講義や講演、各自の研究のプレゼンテーションの準備を、午後は「赤毛のアン」のミュージカルや「赤毛のアン」の家であるグリーンゲイブルズ見学などを行った。講義では、CANADA の歴史 (移民政策や先住民族に関する内容など)、及び強風や荒波で PEI の海岸が侵食される自然災害 (erosion) である。午後の活動の時間では、午前中英文から学んだことを実際に確かめるような活動もあった。

powwow と呼ばれる先住民族の踊りを野外広場で鑑賞したり、カナダの文化や歴史のつながりを表現したミュージカルを CONFEDERATION CENTRE OF THE ARTS の屋外で鑑賞したりした。

また、気象の研究者から地球温暖化の島への影響について直接話を聞いた。授業最終日の個人研究プレゼンテーションは、すばらしい発表になり、現地の先生方からお褒めの言葉をいただいた。



プレゼンテーションの様子



グリーンゲイブルズ（赤毛のアン）

中国北京市の景山中学（日本の高校にあたる）の男子５人、女子５人の生徒が７月１３日（金）～１５日（日）にかけて本校を訪れた。ホスト役の生徒宅にホームステイし、本校のそれぞれの通常授業にも参加して、多くの生徒と共に学校生活を一緒に過ごした。

13日の昼の全校集会では本校生徒会長と景山中学の代表がスピーチ交換を行った。また、午後は本校卒業生の案内で東京大学本郷キャンパスを訪問し、その後、本校桐陰会館和室において浴衣を着て抹茶を点て、和菓子を楽しむなど日本の伝統文化に触れた（写真参照）。



今回の来校は、(財)イオン1%クラブ主催の小大使活動として7月12日(木)～18日(水)の日程で来日したもので、本校での学校交流の他、首相官邸訪問など種々の小大使活動を本校の生徒と一緒にに行った。

10月には、筑波大学附属高校から10人の生徒が、小大使活動のメンバーとして北京市および景山中学を訪れた。





(5) シンガポールの HWA CHONG 校との交換留学

シンガポールの HWA CHONG 校との交換留学で 9 名のシンガポール人高校生と 2 名の先生が 5 月 26 日（土）から 6 月 3 日（日）まで来校し、ホームステイをしながら授業に参加した。

短期留学生は毎年 11 月に来校していたが、筑波大附属高校の修学旅行により日程が前後するため、今年度から 5 月に来校することになった。また、HWA CHONG 側の希望で、この留学期間に長野県蓼科町の桐陰寮で自然体験を行った。来日したその日にバスで長野県に向かい、長門牧場を見学して、夕食は筑波のホストと共にカレーライスを作って食べた。翌日は車山山頂に登り、ハイキングをして、帰りに茅野市内で味噌造り体験を行った。

5 月 28 日に全校で歓迎会を行い、28 日から 31 日まで筑波での授業に参加し、6 月 1 日は筑波大学と東京大学見学、6 月 2 日は HWA CHONG 校の生徒だけで東京観光を楽しんだ。そして、6 月 3 日の昼にシンガポールに帰国した。

どの生徒も蓼科自然体験を楽しんだという感想を残してくれた。



(6) 韓国に関する講演会

6月22日（金）、株式会社H2インタラクティブ共同代表の三好平太さんによる講演会が行われた。『韓国という「軸」：Things that make my mind complicated over and over again』という演題で、事前アンケートに基づく韓国の実態について説明頂いた。参加者は今年の7月にアジア太平洋ヤングリーダーズサミット（シンガポール）、国際学術シンポジウム（韓国）への派遣が決定している代表生徒が中心であった。

三好さんは日本と韓国を行き来する生活を送りながら、「海外と情報の伝わり方にタイムラグがある」という話をされ、生徒たちは驚いている様子だった。数か月後に世界を舞台に活動することとなる生徒たちにとって、非常に有意義なものとなった。



2018 年度国際交流プログラムにおける生徒の海外・相互交流での活躍

1. 本校の国際教育の特徴

本校における国際交流プログラムの目標は、中高6年間を通じて「トップリーダー形成の一助として、国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材の育成を図る」ことである。

この目標の下、本校の国際教育の特徴を上げるとすれば、以下のとおりである：本校はスーパー・サイエンス・スクール（SSH）に指定されて第4期17年目であるが、このSSH事業の支援を受けた国際交流活動が本校の中心になる。その中で最大のものは、2009年より続いている、姉妹校の台中第一高級中学（以下、台中一中；なお、日本の高校に相当する）との研究交流である。SSHプログラムなので、理数系がテーマの研究文化交流という色合いが強いが、文系の内容でもしっかりしたものであれば排除するわけではない。とはいえ、全体としては理数系テーマの生徒が発表の中心になるため、文系生徒がより参加しやすい国際交流事業として、筑波大学からの予算補助を得て2013年に開始した釜山国際高校との文化交流プログラムもあり、この台中・釜山との派遣交流が本校の国際交流活動の2つの柱となっている（両校とはこちらからの派遣ばかりでなく、本校への訪問の受け入れも行っており、相互交流ということができる）。そこに、他のSSH校との連携で行っている国際交流プログラムが加わる。2013年にはイングリッシュ・ルーム事業もスタートさせ、英語による学術発表の基礎となる英語でのコミュニケーションの機会を全生徒に提供するだけでなく、実際に海外などで発表をする生徒のプレゼンテーション事前準備にも大いに役立っている。



釜山国際高校の本校訪問における交流（2019年1月15日）

2. 平成 30 年度活動報告

本校の国際交流プログラムは前述のように、本校単独で企画・実施する、台中一中及び釜山国際高校との交流事業と、他の SSH 校の企画に本校の生徒・引率教員が参加する 2 つの形態に分かれる。今年度は、他の SSH 校との企画は残念ながらなかったため、以下に本校の企画を中心に述べる。

(1) 台中第一高級中学 (台中一中)

本校の SSH 関連国際交流事業として 2009 年に始まり、今年度で 9 年目となる。当初は本校から先方への訪問のみであったが、2013 年に台中一中の日本訪問旅行に合わせた本校訪問が実現し、本校では国際交流デーとして 1 日の特別スケジュールを組んで迎えた。以降隔年で本校訪問があり、2017 年度は第 3 回目が行われた。

① 台中一中の本校訪問

今年度は、受け入れ交流年ではなかったため、実施はしなかった。ただし、2019 年度はすでに受け入れが決まっており、5 月 28 日 (火) に行う予定である。

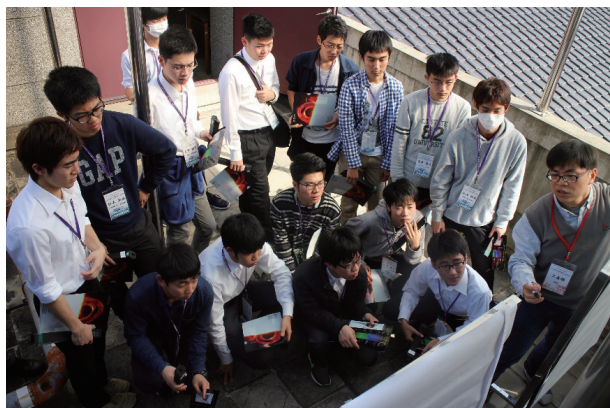
② 台中一中訪問 2018 年 12 月 11 日 (火) ～ 16 (日)

2015 年に姉妹港締結した台中一中訪問は、本年度で 10 年目を迎えた。本校より高 2 生・12 名、高 1 生・4 名、引率者 3 名が参加。12 月 12 日 (水) に国立自然科学博物館を訪問し、13 日、14 日に台中一中で研究交流を行った。13 日は歓迎会・授業参観 (地学・生物実験)・高 1 生徒による学校紹介、台中一中の天文台訪問など、文化交流を楽しんだ。翌 14 日は高 2 生徒による研究発表で発表時間 15 分、質疑 5 分、本校生徒 6 本、台中生徒 6 本の発表が行われた。テーマは理数系が中心であったが、本校からは「水俣病」に関する発表もあり、台中一中の教職員の関心も引き、現地での新聞取材も受けたほどであった。研究発表ばかりでなく、昼休みには一緒にスポーツをしたり、終了後には夜市へと案内されたりと生徒同士の交流も大いに盛り上がり、研究・文化交流両面で刺激を受けていた。参加した生徒の感想を一つ二つ紹介する：

「筑駒の生徒の発表は事前に複数回聞いていて、それぞれ色々な趣向が凝らしてあって面白かった。

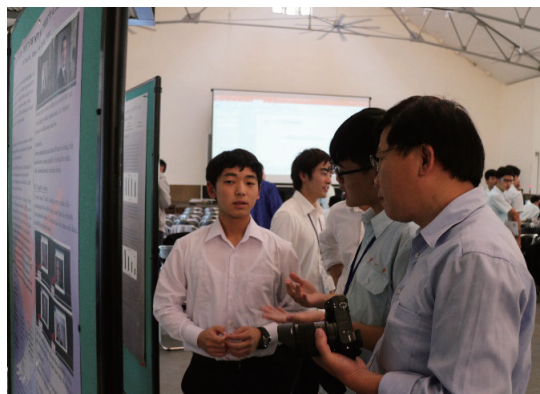
しかし、台湾の生徒の発表の仕方は、それ以上の、とても洗練されたもののように感じた。研究の内容は特別高度なものではなかったが、それを英語で表現する能力が彼らはとても高く、さらに、アイコンタクトや間の取り方など、僕らがスピーチにおいて気をつけるように言われていることを彼らは完璧に実践していた。台湾をはじめ、アジア諸国では英語の教育にとっても力を入れているのは以前から知っていたが、まるで母国語のように英語を話す彼らを見て、僕は本当に驚いた。」(高 2 生徒)

「授業を通して感じたことは、台中一中の生徒は話し上手でかつ積極的だということだ。地学の授業でも、筑駒生が分からなそうに立っていたら例えばバディでなくても気軽に話しかけ、説明をあげている場面が散見された。さらには昼食の時の雑談でも、日本人が興味を持ちそうな話を多くしてくれ、お互いに盛り上がる事ができた。英語がそれほど得意ではない生徒でも、スマホでの翻訳機能を活用して何とかコミュニケーションをしようとしてくれた。また、その知識の多さにも驚かされた。自分が得意だと思っていた化学の事象の説明の時も、自分の話を一聞だけで十を理解し、その説明の補足してくれるあたりには感嘆した。さすがはエリートの集まるクラスだと感じさせる授業だった。」(高 1 生徒)



台中での授業参加で耳を傾ける

今年度からの変化の一つは、ポスターセッションが加わったことである。発表の際質問できなくても、そのあとのポスターセッションで、発表者により近い形で気楽に質問し、また質問される機会を生徒たちは持つことができた。



ポスターセッションでの応答



発表会場の様子

ポスターセッションについての生徒感想も挙げておこう：

「今年は研究内容をまとめたポスターが会場の後ろに張り出された。発表の内容について考察を深められた上に、発表を行わない台中一生徒の研究も見ることができたので、研究交流の面でとても有効であると感じた。筑駒での交流会でも、同様のことができると思う。また、昼食時に自分はほとんどバディとしか話せなかったが、何組か集まってグループになれば話題も出やすく、より多様な意見が聞けただろうと思った。」(高2生徒)



休憩中にデザートをいただく

「その甲斐あってか、本番は多くの方々に聞いていただき、非常にうれしかった。その後のポスターセッションでも多くの方々に質問に来ていただいて、三角形というテーマに興味をもっていただけたのではないかとと思っている」(高2生徒)

(2) 韓国・釜山国際高校

本校の国際交流事業のもう一つの柱であり、主に文系向けのプログラムとして、筑波大学からの教育長裁量経費による支援を受け、2013年より続いている。基本的に、釜山国際高校から本校訪問が1月に行われ、3月末に、本校生徒が釜山国際高校を訪問する、という相互交流を行っている。今年度も1月中旬に釜山国際高生が本校を訪れ、有意義な交流を行った(扉の写真)。詳細を以下に述べる。

① 釜山国際高校からの本校訪問 2018年1月15日(火)

釜山国際高校より生徒・高校生10名(男子2、女子8)、引率2名(数学・地理)が本校を訪問した。本校と同じく、附属中学もあるが、今回は中学生の参加はなかった。午前中は、50周年会館にて、釜山国際高生と本校自治会生徒・釜山派遣予定生徒との歓迎交流会を行った。まずパワーポイントを使って両校の学校紹介、アトラクション(本校は歌及び剣道形・釜山国際はダンス披露)。その後、小グループに分かれて、お互いの意見交換。一緒に昼食をとり、校内を案内しながら散策。昼の高校の集会に出てもらい、釜山国際高生代表挨拶、本校も自治会長が歓迎のあいさつを行った。

5時間目、授業参観では釜山派遣予定生徒がバディとなり、いくつかの授業に連れて行き、バディ

が適宜英語で説明をした。本校では、生徒ばかりでなく、教師も国際交流に協力的で、授業プリントの英語版を準備したり、日本語で韓国の詩を話題に授業を進めてくださった方もいた。



剣道形を披露



後列で授業参観と説明



生徒集会で釜山国際生徒を紹介



ロータリー前で友好を深める一枚

釜山国際高生を迎えたのは、今年の3月釜山国際高校に派遣予定の12名の高1・高2生徒である。行くことが決まっているだけに、事前に韓国生徒と交流できるのは非常に有益であった。

交流した感想を一つ挙げよう。

「全体としてすごく楽しかった。また、自分の英語は概ね通じたが、向上の余地を痛感した。始めのパフォーマンスはあって良かったと思うし、双方のプレゼンも興味深かった。グループでの交流は、始めは双方の緊張もあり、話題がなく結構困ったので、秋元先生に借りた質問が書いてあるサイコロを使うことにした。(細かいことだが一つの質問に全員が答えるのではなく一人ずつサイコロを振るとよいと思う)すると質問に関連して話題が広がり盛り上がった。少しジャグリングもしてみた。校内散策ではそれまでの机越しとは違い、より自由に話げできた。BIHSについての話も聞いた。(中略)まとめとして、筑駒生側の積極的な交流とそれなりの英語力が求められると感じた。3月の訪問が楽しみである。」(高2生徒)

② 釜山国際高校訪問 2018年3月25日(月)～29日(金)

今年度の釜山国際高校訪問は3月末なので、この報告集を作成時点では準備の段階である。しかし、上でも紹介したように、釜山国際生の本校訪問の際には、意見交換やバディ役として既に交流をはじめ、メールアドレスやライン交換を通じて、お互いのやり取りをしている。また、釜山国際高校でのプレゼンテーション(3チームに分かれ、「日本語・韓国語比較」、「日韓の食文化」、「日本の伝統行事」のテーマで発表予定)の練習を、イングリッシュ・ルームの講師の下で開始するところである。

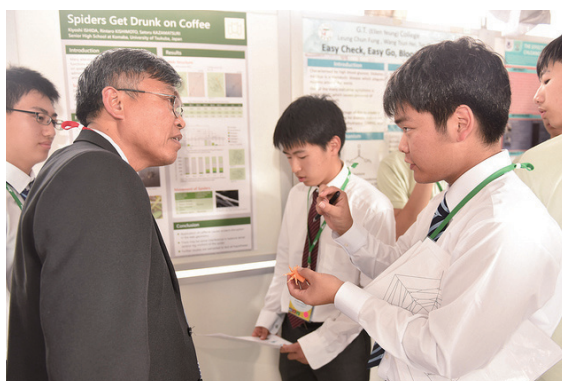
(3) その他の国際交流事業

今年度はタイ国際サイエンスフェアが開催され、本校も招待を受け3人の生徒が参加をした。

① Thailand International Science Fair 2019 (TISF 2019)、2019年1月7-12日

(Mahidol Wittayanusorn School, Thailand) (3名)

テーマはクモの巣の研究で、高校2年生の3名、および引率として校長先生に行っていただいた。会場はマヒドン高校。マヒドン大学の付属校ではなく。タイ文科省直属のタイで最高レベルの高等学校とのこと。18カ国から65校が参加し、331名の参加者で開催されるサイエンスフェアで、ポスターのレベルも大学生よりはるかに高いものとは引率した校長先生の談です。



ポスター・プレゼンテーション



サイエンス・アクティビティ



カルチュラル・エクスカーショ



ヴァラエティ・ゲーム・ナイト

わずか、4、5日の期間に研究発表あり、ポスターセッションあり、文化交流あり、サイエンス活動ありとメニュー満載のようです。参加した生徒の感想は：

「TISF2019に参加し、日本とは大きく異なるタイの文化に触れたり、レベルの高い他校の研究発表を聞いたり、貴重な経験をさせていただいたと感じています。(中略)このような環境で日々を過ごし学ぶMWITの生徒は、言うまでもなく優秀で知識に富んでおり、同世代にこんな人たちがいるのかと刺激を受けました。また英語もみな非常に堪能であり、日常会話だけでなくサイエンスの専門用語なども英語でカバーできている点に驚きました。(中略)今回、私たちは研究についてのポスター発表と口頭発表をさせていただき、これらを通して多くのことを学べたと思います。口頭発表が10分しか持ち時間が無かったり、ポスターのサイズ指定が標準より小さいものだったり多くの制限があったせいで、発表準備には膨大な時間と労力をかけることになりました。年末年始を返上して作業に明け暮れた日々が思い出されます。ただ、発表当日では予想を遥かに上回る人が私たちの研究に興味を持って質問してくださり、他の国からいらした専門家の方々にもアドバイスをいただき、かけた労力に見合っただけのものを得られたと思います。」(高2生徒)

② 筑波大学外国人教員研修留学生による本校文化祭などの参観

ここ数年にわたり、筑波大学外国人教員研修留学生を本校の音楽祭と文化祭に招待し、交流する企画を実施している。今年度は5月16日に本校の授業参観、6月18日に音楽祭、11月3日に文化祭に来ていただいた（38期4名、39期10名。引率1名）。事後の感想文では、それぞれの行事に対して高い評価をいただいた。



授業参観後の質疑応答



文化祭（テーマ垂れ幕の前で）

③ 国際交流プログラム参加生徒による報告会 2019年2月23日

2019年2月23日、同年度（前年度）の国際交流プログラムに参加した生徒による報告会が行われる。これは、国際交流に興味のある中学生に対して現地での体験を語り、フィードバックするもので、参加した中学生は、高校での国際交流について展望を持つ良い機会となり、報告した高校生にとっても、自分の経験を下級生に語ることでもう1度その体験を振り返る機会となる。（写真は去年のもの）



3. まとめ～生徒の変容などに関して

以上、本校の国際交流の実践を紹介した。本校の国際交流の特徴は、事前準備に相当時間をかけていることである。台中一中の研究発表では、高2課題研究で自分の研究テーマとしたものを半年かけてまとめ、それを英語でプレゼンする。釜山国際高校との交流では、3班に分かれた参加者がやはりテーマを決めて、プレゼンの準備をし現地で発表する。つまり、現地での交流以前に、相当に自分を追い込んだうえで異文化生徒との交流をし、また新たな刺激を受けるわけである。当然のことながら、これらの経験を通して、参加者は学力面でも文化面でも大いに成長を遂げる。卒業後、大学で海外留学をし、本格的な研究を行う者が多いこともそれを示している。

目下、卒業後の生徒のアンケートを取り、今後はその後の進路への影響など研究していきたい。

（文責：研究部・国際交流担当 八宮孝夫）

(総合学科 + SGH + IB) × SDGs Ver2019 へ

1. 本校の国際教育の特徴

筑波大学附属坂戸高等学校（以下「本校」）では平成20年に校内の国際教育推進委員会（Committee of International Studies、以下「CIS」）を設置し、それ以来本校独自の取り組みである「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」、ブラジル、タイ、カナダ、台湾、インドネシアなど各国からの留学生の受け入れ、ユネスコスクールへの加盟、学校設定教科「国際」とその科目の設置、そして本校が主催する「高校生国際ESDシンポジウム」などを通して、総合学科高校だからこそ可能である多角的な国際教育のあり方を模索しながら実践を積み重ねてきた。そして、これまでの本校の実践の成果をベースとして、平成26年から5年間、文部科学省のスーパーグローバルハイスクール校の指定を受けることになった。語学だけではなく、「グローバル社会において、自分は社会と将来どのようにかわり、平和で持続可能な社会を実現するために、自分は何ができるか。」を生徒自身が考え、実践できることを重視している。

1946年に地元の農業高校として発足してから70年、1994年からは日本初発の総合学科高校のパイオニアとして20年以上歩みを重ね、平成26年度のSGH指定後は、総合学科を生かしたグローバル社会におけるキャリア教育の実践を積み重ねている。そして、2018年4月、国際バカロレア日本語DPの1期生が入学した。2019年4月からは本格的にIBの授業も始まる。

「総合学科」+「SGH」+「IB」の学校運営の中で、課題研究と国連持続開発目標SDGsを共通言語に、学校運営を進めてきた2018年度であった。SGH5年が終了し、IBの授業の始まる2019年以降、筑坂の国際教育をどう舵とっていくか模索の続いた2018年度であった。本稿では、2回目を迎えた、ジャカルタでのインドネシア日本高校生SDGsミーティングおよび、11回目を迎えた海外卒業研究支援制度を中心に報告する。



第7回高校生国際ESDシンポジウム・第4回全国SGH校生徒成果発表会
SDGsを軸に、海外6校、国内18校が参加
(2018年11月8日、於：筑波大学東京キャンパス)

2. 日本インドネシア国交樹立 60 周年記念事業 認定事業 「第2回インドネシア日本高校生 SDGs ミーティング@ジャカルタ」

SDGs とは、Sustainable Development Goals の略である。2015 年 9 月、ニューヨーク国連本部において開催された「国連持続可能な開発サミット」で、193 の加盟国によって「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ（2030 アジェンダ）」が、全会一致で採択された。この、2030 アジェンダでは、「誰一人取り残さない－No one will be left behind」を理念として、国際社会が 2030 年までに貧困を撲滅し、持続可能な社会を実現するための重要な指針として、17 の目標（ゴール）が持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals：SDGs）として設定された。

これまで日本国内では、本校と交流実績を持つ海外校との交流を深めて生徒の国際的な視野を広げるとともに、持続発展可能な社会を目指して地球的課題に主体的に取り組む姿勢を涵養することを目的として、2012 年から「高校生国際 ESD シンポジウム」を実施してきた。SGH 指定から組織した S-CIS（生徒国際教育委員会：Student Committee of International Studies）のメンバー（本校の 1～3 年次生で国際教育活動に興味のある生徒が主体的に参加している）が中心となり、受付や会場設営、照明や視聴覚機材の操作、全体司会やシンポジウムのファシリテーターを行ってきた。この活動を海外にもひろげ、本校と海外の学校との実質的な交流を深め、さらには SGH の成果を国内だけではなく海外へも発信していくために、昨年度から、あらたな取り組みとして、「インドネシア日本高校生 SDGs ミーティング」を開始した。2 回目となる本年度は、これまでの本校のインドネシアにおける実績から「日本インドネシア国交樹立 60 周年記念事業」の認定をうけ、平成 30 年 8 月 9 日、昨年に引き続き中央ジャカルタにあるインドネシア政府環境林業省のホールにおいて実施した。本大会でも、SDGs は、両国、各学校の ESD 活動をより具体的に位置づけ、それぞれの関連性を可視化するツールとして国を越えて機能した。

当日は、日本から本校、中部大学春日丘高等学校の SGH 2 校、インドネシアからは、ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校、インドネシア政府環境林業省附属林業高等学校、南タンゲラン第 2 高等学校、ブカシ国立第 1 高等学校、ダルマガ国立第 1 高等学校、ウムルクロ高等学校の計 6 校、計 8 校が参加して実施した。各学校の課題研究の発表を SDGs と関連付け、ポスターセッションも日本における大会と同様に行い、これまで国際で実施してきた ESD シンポジウムのノウハウを生かした国際シンポジウムを海外で運営することができた。来年度は SGH の指定が終了してしまうが、昨年度、本年度の海外における 2 回の開催経験を何らかの形で活かしていきたい。



日本インドネシア国交樹立 60 周年記念事業 認定事業
「第2回インドネシア日本高校生 SDGs ミーティング@ジャカルタ」
2018 年 8 月 9 日（於：中央ジャカルタ インドネシア政府環境林業省本庁ホール）

3. 「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」

平成 20 年度より実施しているこのプログラムは、3 年次の学校指定必修科目「卒業研究」で国際的なテーマを扱う研究を行う（または行おうとしている）生徒に対し渡航費の援助を行うものである。20 年度から 29 年度までの 10 年間で計 60 名の生徒がこのプログラムに応募し、うち 19 名の生徒を引率教員とともに海外の各国へ送り出してきた。30 年度においても、2 年次生を対象に募集した。ただ、年々、学校行事や課題の増加など、生徒の負担も増加しており、1 回目は 2 名のみの応募となった。選考の結果該当者なしとなり、2 次募集を行い 4 名の生徒が応募した。それぞれの生徒の研究テーマと応募理由は下記の通りであった（A～B が 1 次募集、C～F が 2 次募集）。

生徒	希望渡航先	研究テーマ
A	シンガポール	持続可能なツーリズムに関する研究
B	インドネシア	インドネシアの農村部の小学生を対象とした環境教育プログラムの開発
C	台湾	持続可能なツーリズムに関する研究
D	フィリピン	フェアトレードに関する研究
E	インドネシア	インドネシアの農村部の小学生を対象とした環境教育プログラムの開発
F	シンガポール	海運に関する研究

CIS において「海外への渡航により卒業研究の深化が十分期待できるか」「費用に問題はないか」「実現可能性は十分か」などの観点から書類及び各生徒によるプレゼンテーションにより選考を行った結果、生徒 F を支援対象とすることに決定した。このプログラムは、国や地域は指定せずに実施してきたが、毎年、予算が厳しくなってくる中で、遠方への派遣が厳しいこと、また 2 年次「T-GAP」でアセアンに関する活動を行っていることから、渡航先をアセアン+3（中国・韓国・台湾）に限ることとした。

テーマに関しては、インドネシアにおける国際 FW に関するもの、2 年次 T-GAP と関連したもの、科目群選択の学びに関連したものなど、日ごろの学びの成果を活かした提案が多くみられた。

4. 生徒の変容について

SGH 指定最終年となった。全校を対象にした国際教育活動も浸透してきた。生徒の変容に関しては、詳細は本校の SGH 報告書に譲るが、文部科学省が SGH の成果指標にしている「卒業時における生徒の 4 技能の総合的な英語力として CEFR の B1～B2 レベルの生徒の割合」は、指定前はわずかに 3 % であったが、とくに SGH 指定後に新設した SG クラスは、英検 2 級取得者が大幅に増加し、英検準 1 級合格者だけではなく 1 級合格者もでた。さらに、CEFR も B1～B2 レベルも 80 % に達した。

現在、本校だけではなく、国際連携協定校の生徒の変容も測定を開始している。附属学校群の国際教育の成果が、学校群や国内にとどまらず、世界に波及していく様子もとらえていきたい。



JST さくらサイエンス事業の受け入れも
行いました（2018 年 6 月 21 日）



愛媛大学附属高等学校と連携して、「米」と
「餅つき」によるアセアン交流学习も行いました。

【資料】平成 30 年度 国際教育・ESD 活動一覧（抜粋）

月	内 容
4 月	1 年次 SG クラス「グローバルパスポート」（1 単位）開講
4 月	タイから 1 名の留学生が来校（8 カ月）
6 月	「関東甲信越北陸地区 SGH 高校課題研究発表会（北陸新幹線サミット）」へ生徒 17 名参加
6 月	AIMS プログラム筑波大学留学生 34 名来校・1・2 年次生と交流
6 月	さくらサイエンスプラン・ハイスクールプログラムでインドネシア高校生来校
6 月	フィリピン、インドネシアの姉妹校に 1 年間留学していた 2 名が帰国
7 月	韓国ユネスコ国内委員会招へい日本教職員韓国派遣プログラム 教員 1 名参加
7 月	3 年生 2 名が姉妹校ボゴール農科大学附属コルニタ高校に 1 年留学へ
7 月	3 年生 1 名が姉妹校インドネシア環境林業省附属高校に 1 年留学へ
7 月	1 年生 1 名がアメリカ高校に 1 年留学へ
8 月	国際フィールドワーク（インドネシア）実施 生徒 7 名教員 2 名参加
8 月	第 2 回日本インドネシア高校生 SDGs ミーティング@ジャカルタ開催
8 月	国際フィールドワーク入門（黒姫高原）実施 生徒 29 名、教員 3 名、筑波大学留学生 2 名参加
8 月	教員 2 名が海外校外学習視察・現地打ち合わせでバンクーバーに渡航
9 月	台湾・デンマークから 2 名の留学生が来校（1 年間）
10 月	姉妹校コルニタ高校から 7 名の留学生が来校（3 週間）
10 月	福井県立高志高等学校生徒 20 名、教員 2 名来校
10 月	京畿外国語高等学校生徒 55 名、教員 5 名来校
10 月	インドネシア・アルファセンタウリ高校 生徒 22 名、教員 4 名が来校
11 月	台湾・小港高級中学 生徒 11 名、教員 2 名が来校
11 月	インドネシア・フィリピン・タイより生徒 11 名・教員 5 名ホームステイ受け入れ
11 月	第 7 回高校生国際 ESD シンポジウムを開催
11 月	第 4 回 SGH 生徒成果発表会開催 海外校・SGH 校 20 校によるポスターセッション
12 月	SGH 全国高校生フォーラムにて 3 年生 1 名がポスター発表
12 月	フィリピン大学附属ルーラル高校スタディツアー 生徒 4 名、教員 1 名が来校
1 月	東京学芸大学主催 SSH/SGH 課題研究成果発表会 生徒 8 名、教員 1 名参加
1 月	タイ・カセサート大学附属高校カンペンセン校舎 教員 2 名訪問・研究協議
2 月	第 5 回 SGH 研究大会・第 22 回総合学科研究大会を開催
2 月	関東地方 ESD 活動支援センター 地域意見交換会 in 埼玉 2019 を開催
3 月	1 年次海外校外学習（カナダ・バンクーバー）実施
3 月	「国際的な視野に立った卒業研究支援 P」 生徒 1 名・教員 2 名がシンガポール渡航

（文責：建元喜寿、今野良祐）

国際教育を通じて児童・生徒の視野を広げ、未来へと続く道を作る

1. 附属視覚特別支援学校の国際教育の特徴

今年度の本校の国際教育活動は、高等部で「トビタテ！留学 JAPAN」の制度を活用したタイ留学やトビタテ生の留学成果を広く伝える活動、国際交流部の The World of Friendship 活動として青少年国際交流推進センターの国際理解教育支援プログラムを活用し、外国人講師を派遣していただき異文化を理解する活動や、ルーマニア大使館等を訪問してのルーマニアについて調査する活動、フィリピン国立盲学校の生徒と理科実験を共に繰り広げ、日本の視覚障害教育の取り組みを生徒たちで進めていくなど、多岐に渡っての活動が行われた。

また、鍼灸手技療法科では、海外における国際貢献事業としてのインド共和国・国立視覚障害者施設との視覚障害者職業教育支援についての連携と推進、ドイツ・ハンブルグ大学の教員が来校し、授業交流等を進めていったことや、ミャンマー社会福祉大臣の鍼灸科見学などの活動も積極的に行っている。国際教育推進に向けて取り組みはもちろんのこと、教員の研修の機会が増えるなど、大きく邁進しているとも言える。

本校の今後の国際教育の展望については、SDGs の 17 の大きな目標に繋がる教育活動を展開させていくことにある。SDGs の目標達成につながる教育を、本校の授業や国際教育事業にどのように取り扱い、実現していくのか、そこから児童・生徒の国際的感覚、国際素養を高める指導にどう引き伸ばしていけるのかが 2019 年度以降に取り組むべき課題である。既存の国際教育に新たな視点を加えた教育にチャレンジしていきたい。そのためにも、国際性を持って、世界で活躍する先輩・卒業生等とのつながりをより強化していくこと、筑波大学や筑波大学附属学校群の連携はもちろんのこと、他大学やボランティア団体、支援組織とも関係性を深めていくことで、本校の国際教育活動を加速させていきたい。

(文責：佐藤北斗)



トビタテ！留学 JAPAN 4名の留学生がタイ・コンケン盲学校で活躍（CFBT 所長と共に）

I トビタテ！留学 JAPAN 共に生きる～タイ留学から、将来の世界を変える力を得る～

1. トビタテ！留学 JAPAN の制度でタイ王国へ

トビタテ！留学 JAPAN（以下、トビタテ）高校生コースは将来世界で活躍したい、日本から世界に貢献したいと熱望する、意欲高い高校生の留学を高等学校段階から文部科学省が支援する制度である。

本校では本制度を利用して留学を積極的に行っており、昨年度まではチェコ共和国へ高等部の生徒6名が留学を果たした。本年度からは留学先をタイ王国（以下、タイ）とし、高等部2年の生徒4名がトビタテのアカデミック・ショートコースに合格し、3週間タイに留学する機会を得た。

2. 研修生

高等部2年普通科 岩崎悠花、神谷歩未、又吉風歌、三好里奈 4名

3. 留学先

受入校 The Christian Foundation for the Blind in Thailand

（タイ視覚障害者支援クリスチャン財団、以下 CFBT とする）

・1/4～1/11【全員】コンケン（タイ・北東部）

Khon Kaen School for the Blind（コンケン盲学校）及びインクルーシブ教育校

・1/12～1/17【岩崎・又吉】コンケン（タイ・北東部）

コンケン盲学校及びインクルーシブ教育校

・1/12～1/17【神谷】ペップリー（タイ・中部）

Dhammikka Wittaya School for the Blind, Pethburi（ペップリー盲学校）及びインクルーシブ教育校

・1/12～1/17【三好】ハジャイ（タイ・南部）

Thammasakoi Hat Yai School for the Blind, Songkhla（ハジャイ盲学校）及びインクルーシブ教育校

・1/18～1/23【全員】バンコク（タイ・中心部）

Ban Dek Raminthra School for the Blind, Bangkok（バンコク盲学校）

4. 留学日程 2019年1月4日（金）～1月23日（水）（20日間）

日にち	内容	宿泊先
1/4（金）	朝 羽田空港（国際線ターミナル）タイ国際航空にてコンケンへ タイ・バンコク（スワンナプーム国際空港）乗り継ぎ 夕方 コンケン着（コンケン空港） CFBT 教職員による歓迎会	ホテル
1/5（土）	午前 コンケン盲学校生徒との交流会・校内オリエンテーション 午後 コンケン職業訓練大学訪問及び研修	ホテル
1/6（日）	CFBT の先生方とコンケン観光（コンケンを知る）	ホテル
1/7（月）	CFBT 本部及びコンケン盲学校 入校式及び1人1家庭のホームステイ先の発表 午前 CFBT の特別支援学級訪問及び研修 午後 CFBT の障害学生支援室、コンケン大学障害学生支援室研修	ホームステイ
1/8（火） ～1/11（金）	コンケン盲学校での授業・研修 インクルーシブ教育校での授業・研修 （1人の研修生につき、1人の視覚障害生徒がバディとしてつく） 1/11（金）の夜 CFBT の生徒たちとの交流会（パーティー）	ホームステイ

1/12 (土)	・岩崎・又吉：コンケン ホストファミリー及びコンケン盲学校の生徒たちと過ごす ・神谷はペップリーに移動、第2の留学先ペップリー盲学校へ ・三好はハジャイに移動、第2の留学先ハジャイ盲学校へ	ホームステイ 寄宿舎
1/13 (日)	ホストファミリー他と1日過ごす (それぞれの場所で観光)	
1/14 (月) ~ 1/16 (水)	それぞれの盲学校及びインクルーシブ教育校で授業参加 スポーツ交流会 (ゴールボールなど)	ホームステイ 寄宿舎
1/17 (木)	移動日 バンコクに移動 CFBT の生徒たちと一緒に移動	寄宿舎
1/18 (金)	マヒドール大学での点字読書コンテストに参加	寄宿舎
1/19 (土)	TBSO (Thai Blind Symphony Orchestra) のイベントに参加	寄宿舎
1/20 (日)	CFBT の生徒たちとバンコク市内観光	寄宿舎
1/21 (月)	・タイ国立視覚障害者協会 (TAB) 訪問 視覚障害当事者が経営するコーヒーショップ、アートギャラリーなど、 視覚障害支援関連施設の訪問及び体験 ・ユニバーサル障害者財団訪問	寄宿舎
1/22 (火)	バンコク盲学校授業参加、CFBT の先生方、本校卒業生の堀内さんやタマサート大学障害学生支援センターのジンタナーさんと交流	寄宿舎
1/23 (水)	日本に帰国	

5. 留学を通して学んだこと (生徒の感想)

高等部普通科2年 岩崎悠花

タイでは、ホームステイや寄宿舎体験、日本の文化や視覚障害教育について発信する活動、インクルーシブ教育校で授業を受けるなど、異文化を学びつつ自分の興味のある分野について深められた。

一番楽しかったことは、インクルーシブ教育校での学校生活です。私は高校2年生のクラスに入りました。年齢はばらばらで、どんな障害を持っていたとしても、そうでなくても全ての人と同じ空間で学べるインクルーシブ教育の魅力に楽しさや喜びを感じました。また私は、タイでのインクルーシブ教育校での授業を受けてインクルーシブ教育のメリットやデメリットを感じました。将来は、このデメリットを少しでも解決するための方法を学び、研究したいです。そして、タイで学んだようなインクルーシブ教育のシステムのもとで、難民の子どもたちも平等に教育を受けられ、生活が営めるような支援ができる環境を作ることにつなげていくことが、将来の夢です。

高等部普通科2年 神谷歩未

今回の留学でたくさんのことを学んだとともに、日本のこともタイに紹介してきました。私はアンバサダー活動 (トビタテ生が日本の魅力を伝える活動) として、ペップリーの盲学校で数学の先生と生徒に対し、本校の数学で使用する補助教材を紹介してきました。いくつか紹介したのですが、一番驚かれたのは主にグラフの勉強で使用するホワイトボードと紐磁石でした。見せたときには「？」を浮かべていましたが、使い方を教えたらとても感動していました。また、私たちはグラフの形をイメージするために使用していますが、地図の勉強にも使えるのではないかと考えていて、それは新しい考えだなという私自身の発見にもなりました。タイの盲学校でも使用したいとのことでしたので、いつかこれをタイに寄付したい！と思いました。今回出会ったペップリーの友だちや先生たちとのつながりを大切にしていき、日本とタイの視覚障害教育の良さを伝え合っていきたいです。

高等部普通科2年 又吉風歌

私が一番印象に残っていることは、インクルーシブ校に行って学校生活を送ったことです。私の通った学校は、広くて、大学みたいな学校でした。教科の授業の他にも、中国語の授業や、社交ダンスの授業などの日本にはない授業もいくつかあり、いろんな経験ができました。

世界史の授業では、私の好きな近代史をやっていたので、翻訳アプリを用いながら、冷戦について

友だちや先生と語ったことが、とてもとても楽しく、今でも忘れられない思い出となりました。

今回の留学で学んだことは、たとえ言語が違って、前向きにコミュニケーションをすることが大切で、完璧じゃなくても、何かに頼ってもいいから、積極的に相手と向き合うことです。タイの仲間たちのように、恥ずかしがらずに、積極的になることで、相手との会話も増え、仲も深まりました。

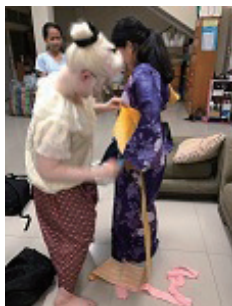
高等部普通科2年 三好里奈

私はタイの視覚障害教育から日本の視覚障害教育を改めて考えること、英語や日本語が通じない相手と積極的に関わることを目標にコンケン、ハジャイ、バンコクの盲学校や統合校に通いました。

タイの盲学校に通って驚いたことは補助具が日本ほど発達しておらず、授業で使う点字盤も携帯用でした。しかし、日本で忘れがちなソフト面でのサポートが特にタイの統合校で進んでいること、タイの生徒たちは助け合いの精神から自然と行動に移せていることに、とても感動しました。

言語だけに頼らない方法で話すことにも魅力を感じました。統合校のペアの友達と、なかなか英語で会話できず、最初はかなり戸惑いでしたが、それでも友だちは知っている英語、そしてタイ語で何度も何度も話しかけてくれました。私もタイ語を覚え、気持ちを体で表現して、彼女と積極的に話そうと努力しました。気がつくと、それが自然とでき、私は他の人にも声をかけにいて、ふざけたり笑ったりもできていました。留学を通して積極性、コミュニケーション力が身につくこと、留学することで新しい自分、そして新しい考え方に出会えることが実感できました。

(文責：佐藤北斗)



Ⅱ 文部科学省トビタテ！留学 JAPAN 第4回留学成果報告会に出場

トビタテ！留学 JAPAN の留学から得たもの

2019年2月3日（日）、トビタテ！留学 JAPAN 第4回留学成果報告会が文部科学省にて行われ、本校高等部3年の田中綾乃さんが選拔出場した。田中さんは高等部2年次に、トビタテ！留学 JAPAN 高校生コース3期生として、チェコのリベレッツに3週間留学した。リベレッツ特別支援学校で障害生徒と共に学び、日本にはないリラクゼーションの授業などにも参加した。

田中さんは2018年10月に行われた関東地区トビタテ！留学体験発表会で優良賞を受賞し、今回は関東地区の代表として、スピーチを行った。

田中さんからは、「チェコの自分らしさを大切にしながら互いに助け合う学校生活について、私の目標である特別支援学校で音楽療法を授業に取り入れることの可能性についてスピーチしました。最後のトビタテ！ポーズでスピーチを終わらせた時には、心から音楽療法士になりたい！という思いを込めて伝えることができ、達成感いっぱいでした。」と感想を述べていた。

田中さんのスピーチ内容の一部抜粋を以下に書き記す。将来の進路選択、そして将来の夢・希望につながるチェコ留学だったことがよくわかる。

「音楽で障害児支援に携わりたい。海外で日本と違う考え方を吸収したい」という思いが、私を留学へと導きました。

私の留学で印象に残っているのは、チェコの特別支援学校やインクルーシブ校では、様々な障害を持つ生徒が互いに助け合いながら共に学んでいたことに驚きました。それぞれが自分のできることを見つけて、授業に取り組んでいる姿、どの生徒にもできない事はあるものの、自然と助け合っている姿がとても印象に残っています。また、様々な自立活動の授業に参加し、その中に音楽療法の教室がありました。リラックスできる環境が整っており、数多くの打楽器を子どもたちは自由に演奏し、音楽に常に触れる機会があることに感動しました。そして最も印象的な忘れられない体験は、お互いに演奏しあったことです。音楽はこんなにも自分自身をありのままに表し、どんな言語よりもコミュニケーションの優れたツールになる。私はそれを海外に行って改めて強く感じました。

この留学で、アイデンティティを大切にする姿勢、そしてコミュニケーションのあらゆる可能性を探す大切さを学びました。私には将来、音楽療法士になって障害児支援に携わるという目標があります。障害がある子ども達に音楽を使ってコミュニケーションの幅を広げ、自分を大切にすることを学び、自分に自信を持てるようになることが、私の理想です。一人でも多くの障害者の社会参加を目指して、トビタテでの学びを社会で役立てていきます。

（文責：佐藤北斗）



リベレッツ特別支援学校に留学した時の写真



トビタテ！留学 JAPAN 留学成果報告会にて発表

Ⅲ 広げよう、深めよう、自分の視点、自分の世界

高等部英語科の取り組み

(1) Food Bank (Second Harvest Japan) Charles E. McJilton 氏による特別授業

高等部1年の教科書の題材として取り上げられている Food Bank の Second Harvest Japan の McJilton 氏をお招きして高等部1、2年生対象に特別授業を実施した。生徒は教科書を読み、質問を用意して事前にご本人に送付し、当日を迎えた。“Food Bank” という日本ではまだ珍しい活動を教科書の題材として生徒は読んできたが、この NPO を立ち上げた McJilton 氏から直接お話を伺い、彼の哲学にも触れ、英文の文字情報の背景にあるものを“体感”として感じることができたであろう。また McJilton 氏は、生徒へ疑問を投げかけながら話を進行し、生徒にとって言語の壁を越えた、心に訴える新鮮な授業となった。



(2) Friendship English

～アメリカンスクール (ASIJ) の生徒とともに～

(A) スカイプ交流授業

アメリカンスクールとのスカイプ活用の英語授業も今年度で3年目を迎えた。15分間に50問の英語の質問にペアで互いに質問と応答を繰り返す形である。英語の質問自体は中学生程度の簡単なものに設定して、スムーズな応答をねらいとした。昨年実施した生徒たちなので、スカイプの形式にも慣れ、英語の質問にも慌てず答えられて会話を楽しめている。1回目が終わったが、質問が一通り終わって何をすればいいかじっと待っているペアや、本当はもう少し踏み込んで聞きたかったけれど遠慮してしまったというペアもいた。今後は用意された質問をベースに「話題を広げる、繋げる」方へと英語のコミュニケーションの力をつけさせたい。

(B) アメリカンスクールへの訪問

昨年度、ASIJ の生徒が本校を訪問交流し、今年度2月に本校生徒が ASIJ に訪問することが実現した。国際交流部の部員8名が訪問した。大規模な学校のため本校にない Fitness Center で体験活動も行った。ASIJ の生徒と本校生徒がペアになり英語でマシンの使い方を説明してもらい、本校生徒は興味深々に体験していた。ASIJ の生徒側も、このマシンを視覚に障害のある生徒にどのように説明すればいいか、最初恐る恐る、ゆっくりと手取り足取りで話していたが、最後のほうでは段々と打ち解けていた。先方の学校では disability awareness に取り組み始めていると伺っている。



(3) 上野学園—ゴードンストンスピーチコンテストへの参加

高等部1年の生徒が上野学園—ゴードンストンスピーチコンテストに第一次審査により入賞者9名に選ばれ、コンテストに出場した。兵庫県や三重県から参加者のある全国大会である。本生徒はフロアバレーボールという日本生まれの盲人スポーツについて“Sports Knows No Boundaries.”という

題名で5分間のスピーチの後、4人の審査員と質疑応答を行った。

準備段階で、彼女にとってこのフロアバレーボールは、小学生から当たり前のように存在するものであるが、パラスポーツでもない、この盲人スポーツが障害のない人たちにとって、全く「未知のもの」であるということを、本人が知るところからスピーチづくりを始めた。どのように説明すれば通じるか、言葉での説明に限界を感じながら、ジェスチャーを少し加えよう！など、スピーチの中でどう伝えるかについて工夫をしていった。バレーボールという名ではあるものの、全く別のスポーツである。チャレンジングな内容であった。スピーチの最後には、彼女が最も訴えたいもの、「どのようなスポーツであれ、スポーツへ賭ける情熱は同じである」というメッセージで締めた。コンテスト後、生徒からは「スピーチを書くことは楽しかった。またこのような機会があったら、教えてほしい。」と催促されている。(文責：英語科 大橋映子)



Ⅳ 高等部国際交流部 「The World of Friendship」活動でルーマニアを調査

The World of Friendship 活動について

The World of Friendship 活動とは、本校高等部国際交流部の生徒が、文化祭に向けて生徒たちが興味のある国について取り上げ、展示という形で紹介した。

本年度はルーマニアについて取り上げた。ルーマニア大使館を訪問したり、ルーマニア大使館大使秘書に來校いただき交流会を実施したり、ルーマニア料理を食べに埼玉県の料理店に出かけたり、日本・ルーマニア協会を訪問するなど、生徒たちの興味・関心のあるテーマについて探求していくことで、ルーマニアの文化、歴史などの知識を深めていくことができた。

文化祭では、国際交流部の展示を見に来られたお客さん1人1人に展示をご覧いただきながら、自分たちが調べたことについて積極的に国際交流部の生徒たちが説明していく。来られたお客さんからは、「毎年違う国を調べていて、とても面白い。来年も楽しみにしています。」とコメントをいただくことができた。知っているようで実は深くは理解できていない国、調査から日本とは違う新たな異文化を学ぶ貴重な機会となっている。



日本・ルーマニア協会を訪問



ルーマニア大使館にて

(文責：高等部国際交流部顧問 佐藤北斗)

V 鍼灸手技療法科の国際教育活動について

1. ミャンマー社会福祉・救済復興省大臣の来校、鍼灸手技療法科見学

2018年5月28日、ミャンマー社会福祉・救済復興省の担当官が来日し、本校の鍼灸手技療法科を見学した際、日本の盲学校の教育がミャンマーのものと圧倒的にレベルが違うことに、担当官は非常に強い印象を持たれ、大臣に報告をされたとのことであった。そして2018年10月26日、ミャンマー社会福祉・救済復興省大臣が担当官2名と共に来校、直々に見学をされることとなった。

現在国際医療ボランティア組織・ジャパンハートは、ミャンマーにおいて視覚障害者の医療マッサージ資格化を行っており、その実現には国家レベルでの理解が必要ということで、ウィン・ミャツ・エー社会福祉・救済復興省大臣の日本招聘を計画した。その中で、日本に行くなら、前回訪日した担当官の中で印象に残っている本校を是非訪問したいという大臣の要望があり、今回の来校が実現した。

10月26日はあいにく本校の文化祭前日の準備日であり、通常授業は実施されていなかったが、鍼灸手技療法科の治療室にて、教育制度や生徒の実技体験など、先方の要望に応えるべく見学内容を整えてお迎えした。先方は分刻みのスケジュールの中、約30分の滞在であったが、茂呂教育局長、太田東京キャンパス事務部長、石塚東京キャンパス事務部学校支援課長の出迎えを受け、鍼灸科教員と生徒による説明や実技体験、また本校のミャンマー人留学生ともお話しいただき、日本の視覚障害者への職業教育に触れていただいた。（文責：原 早苗）

2. 鍼灸手技療法科の海外における国際貢献事業、インド共和国の職業教育支援

専攻科鍼灸手技療法科では2013年2月より、インド共和国における視覚障害者の新しい職業として、日本の視覚障害者伝統の職域である手技療法（あん摩マッサージ指圧）を紹介、普及する事業を行っており、現在国立施設を含む2つの盲学校においてJMMT（Japanese Medical Manual Therapy）の名称で2年間の教育課程を設立し、運営を支援している。

2018年8月に上記2校のうちの1つ、インド国立視覚障害者施設、NIVH（National Institute for the Visually Handicapped）において、10年ぶりに施設長が交代し、当施設の方針に大幅な変更があった。また国内の障害者教育に関する法律にも幾つかの新条項が追加されたため、本校教員（上記事業の責任者）が冬期休業期間を利用して当地を訪れ、NIVH 施設長との会談を行った上、今後ともインド盲学校での日本式手技療法教育を継続して推進していくこと、法律の変更に対応し、現地大学等の提携を含めた発展的対応をして行くことを確認した。（右下の写真：向かって左はNIVH新施設長のナチケート氏、中央は本校教諭の寺崎、右側はインドのカウンターパートNGOのシャーリニー氏）（文責：寺崎 直）



ミャンマー社会福祉・救済復興省大臣の来校



聴覚特別支援学校における国際教育推進事業

1. 本校の国際教育の特徴

筑波大学附属聴覚特別支援学校（以下「本校」）における国際教育推進事業の目的は、海外の聾学校（フランス・韓国・台湾）との生徒相互訪問交流、オンライン交流、海外企業との連携、海外からの来校者を積極的に受け入れることを通し、国際的資質を育て、これからの国際社会に通用するグローバル人材の育成を目指している。さらに、本校生徒が国際教育推進事業の経験により、聴覚障害者の中や地域社会や職場で広い視野に立ち、活躍していくことを目指している。

今年度は、韓国ソウル聾学校の教員生徒 26 名、ロシア・ニジノヴゴロド聾学校教員生徒 8 名が来校し生徒間の国際交流活動を行うことができた。ソウル聾学校とは中学部がこれまでスカイプによるオンライン交流を行っている。今回は初めての本校訪問になり、国際交流協定を延長するための協定調印式および交流会を行うことができた。直接の交流ということで、会場は大いに盛り上がり、本校の生徒が積極的に校舎内の案内をしたり、最後の見送りでは抱き合って別れを惜しんだり、深い交流の様子が見られた。ロシア・ニジノヴゴロド聾学校との交流は、日露青年交流センターの事業で本校の文化祭と重ねて実施した。中学部、高等部普通科の生徒が文化祭を案内したり、高等部普通科生徒会が中心になりニジノヴゴロド聾学校のパフォーマンスを文化祭の催し物として組み入れて上演したりした。そのパフォーマンスはパントマイムやダンスで、観客がその場で参加し即興でパフォーマンスをする箇所があり、本校の幼児児童生徒だけでなく文化祭に来場した卒業生や近隣の方々もパフォーマンスに参加し楽しんでもらうことができた。

さらに、高等部専攻科が台湾研修旅行を実施した。ここでは、その詳細について報告したい。



韓国ソウル聾学校 訪問交流

2. 高等部専攻科（造形芸術科・ビジネス情報科）台湾研修旅行の報告

高等部専攻科の造形芸術科（以下造形）・ビジネス情報科（以下ビジネス）では、2015年から台湾の聾学校と交流を開始し、2016年には1回目の台湾研修旅行が実現した。2回目の今年度は平成30年12月11日～14日に行い、造形5名（1年生3名、2年生2名）、ビジネス10名（1年生4名、2年生6名）の生徒が参加した。

（1）研修旅行の目的

研修旅行の目的は、造形とビジネス（以下2科）共通のものと、各科独自のものを、それぞれ設定した。

【2科】

- ・国際的な視野を広げ、自国の文化や言語に対する考えを深める。
- ・現地での交流活動を通して、実社会で活躍するために必要となる社会人基礎力を育む。

【造形】

- ・台湾の歴史的文化と美術の変遷について学ぶとともに、現代における多様な表現媒体に親しみ、表現形式の広がりを理解する。
- ・台湾ならではの風土や景観に接し、表現方法を工夫して制作を進めることで風景画制作の技術の向上を図る。

【ビジネス】

- ・現地訪問を通して物価や商品、貨幣価値などの違いについて理解し、商業的な観点で台湾の文化を捉える。
- ・国際的な流通の仕組みや製品等を把握し、ビジネス情報に関する専門的な知識と考え方を深める。



高等部専攻科 台湾研修旅行 車いす贈呈式の集合写真

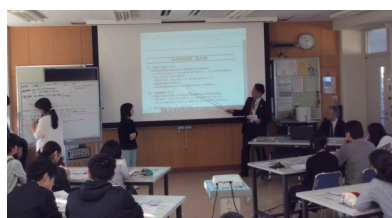
(2) 事前学習

事前学習は2科共通・各科・各教科で行うものと多岐に渡る。

たとえば、造形・ビジネスの共通科目である美術教養の授業では台北故宫博物院の主な文物について学習する時間を設けた。中国の歴史の概略や、展示されている文物の見どころを説明し、本物に触れる期待感が持てるようにした。

造形は、デザイン総合の授業で台北聾学校へのお土産として持参するグリーティングカードを作成した。「日本と台湾」をテーマに1年生がイラストを作成し、2年生がポップカードを制作した。また、絵画総合の授業で本校近隣にある弘法寺を写生し、建築様式の特徴をとらえて描く方法を学んだ。

ビジネスでは、光華商場で行う市場調査と同じ学習を秋葉原で行い、日本と台湾の市場の様子を比較できるようにした。また、台湾ビデオ辞書の作成も行った。当日、想定される会話文の英作文をしたり中国語の翻訳ソフトを準備したり、生徒が自ら海外で積極的にコミュニケーションがとれるように準備する様子も見られた。



旅行会社による説明会



孔子廟見学に向けて（湯島聖堂）



市場調査に向けて（秋葉原）



車いす整備会



写生の校外学習



グリーティングカード

(3) 研修旅行の実際

12月11日

松山空港に到着し送迎バスにて故宫博物院へ移動。到着後現地ガイドの案内で事前学習した文物について一通りの説明を聞いた。前回の訪問と同様美術教養の授業内で学習していたため、解散後も生徒達は各自が興味をもった文物について積極的に見学する姿が見られた。館内は平日午後の時間とあってそれほど混雑していなかったが、それでも人気のある文物の展示前では人だかりができていた。清朝時代の翠玉白菜は別の展示に貸し出されており残念ながら見ることはできなかったが、人気の肉型石は見る事ができた。他にも、親子3世代にわたって製作された象牙透彫雲龍文套球や3cmほどのオリーブの種に彫刻を施した雕橄欖核舟など実物を見た生徒は「想像以上の細かさですね」「実物は想像と違っていた」といった感想を口にしていった。事前に学習した赤壁賦の巻物を見つけた生徒が「先生、ありましたよ」と目を輝かせて報告する様子も見られた。



ガイドによる説明



文物見学の様子



故宮博物院前集合写真

12月12日

この日は、造形芸術科・ビジネス情報科それぞれが、専門教科に関する学習を深めるために研修内容を分けて実施した。

① 風景写生・臺北市立啓聰学校交流（造形芸術科）

造形芸術科は早朝より圓山駅に移動し周辺を写生した。圓山文化遺跡の近くにある台湾の古い建物を再現したエリアは地元の人が時折散歩をする姿が見られ、落ち着いたたたずまいを感じた。

その後孔子廟にて臺北市立啓聰學校の生徒達と合流し見学を行った。臺北校の生徒たちとは初対面にも関わらず自然発生的に自己紹介が始まり、同行してくださった葉校長先生も「こうした交流がすぐにできるのは何よりも良いですね」と仰っていた。孔子廟の参拝経路にしたがって詳細な説明をいただいたあと臺北市立図書館で行われている各啓聰學校の連合絵画展を見学した。ここでは台北市内の特別支援学校に相当する学校の生徒作品が展示されており、葉校長先生が直接本校の生徒達に作品の紹介を行ってくださった。啓聰學校到着後は校内に展示された作品を紹介していただいた。作品の中には写真素材をデザイン的に構成した表現手法が見られ、生徒達は多様な表現方法を興味深く見ていた。昼食の時間にお互いの作品について意見交換をする機会を設けた。生徒が日本から持参した台湾をイメージしたポストカードを提示し、意見を求めた。台湾の食や中世記念堂、台北 101などをテーマとしたもの、また日本の四季や食をテーマとしたものを紹介すると、臺北校の生徒たちから歓声が上がり、生徒達の安堵した様子と喜ぶ表情が見てとれた。用意していた文章による質問事項の一つに、作品中にある吹き出しの語句にふさわしい言葉を入れるにあたってどんな言葉が適切かという問いにも臺北校の生徒はお互いに意見を交わしながら答えてくれた。臺北校の生徒作品は個人で制作したイラスト等が紹介され、日本のアニメが広く浸透していることがうかがえた。知っているキャラクターを見つけて盛り上がる様子も見られた。



孔子廟前集合写真



グリーティングカードの説明



臺北市立啓聰學校前集合写真

② 台湾の経済・文化・歴史についての学習活動（ビジネス情報科）

ビジネス情報科の生徒たちは、臺灣土地銀行行史館（國立台灣博物館）、二二八記念館、中正紀念堂、孔子廟の見学、そして光華商場・三創生活園區で市場調査やコミュニケーション学習を行った。

臺灣土地銀行行史館（國立台灣博物館）には、旧土地銀行（旧日本勸業銀行台湾支店）本店の金庫とその時代に使用されていた銀行帳簿、貸付番号札、銀行員の手帳、土地債権の実物、銀行事務に関する機器など貴重な資料が展示されていた。生徒たちは、台湾で行われていた銀行業務や普段入ることができない金庫内の様子を見学し、時間を忘れてそれぞれの資料に食い入るように見学をしていた。

た。今後は、日本銀行などを見学し、台湾と日本の銀行業務の比較学習を進めていきたいと考えている。

二二八記念館では、生徒たちは、第2次世界大戦後の台湾に関する政治構造、経済不況、社会や文化の問題などの諸相を反映した二二八事件について学習をした。見学の際には記念館のご厚意でその事件のビデオ映像を見せていただいた。生徒達はその時代に起きた悲劇や事件発生後40年続いた戒厳時期によって苦悩した人々の心情に共感したようだった。

台湾の秋葉原といわれる光華商場・三創生活園區では、生徒たちは、出発前に実施した秋葉原市場調査で得た情報関係機器のデータを元に市場調査を行った。その調査時に実際に店員と会話する中で生徒が伝えたいことを翻訳ソフトや日本で準備していった会話文例集などを使いコミュニケーション学習を行った。英語の通じない店員がほとんどであったため、なかなか会話が成立せず、伝えることの難しさを実体験した。

孔子廟の見学では、秋葉原市場調査見学時に訪れた湯島聖堂と比較し台湾と日本のつながりを実感した。孔子廟内には孔子の教えの六芸（礼、楽、射、御、書、数）について体験しながら日本語で学ぶことができる展示があり、生徒たちは、楽しみながら学習することができた。



臺灣土地銀行行史館内見学



二二八記念館前集合写真



光華商場での市場調査

12月13日

3日目は、2科合同で台北101の見学と車いす輸送ボランティア活動を行った。

午前中の台北101見学はあいにくの曇り空だったが、展望台からの景色を見たり、耐震設備のダンパーの写真を撮ったりして、生徒は楽しそうに過ごしていた。

午後からは車いすを贈呈するために基隆市輔具資源中心へ向かった。基隆市輔具資源中心は台北市内からバスで90分ほどの基隆市に位置する障害福祉センターとしてエデン社会福祉基金会によって運営されている。今回、日本社会福祉弘済会のご協力のもと専攻科で生徒が整備した車いす7台を贈呈することが実現した。ビジネス情報科、造形芸術科の生徒たちはこれまでに車いすを分解整備する取り組みは行っていたが、海外に直接届けることは今回が初めての試みであった。このため運搬方法も航空会社に確認し、サイズを超える点については車いすを分解し各部品を人数に割り振り対応した。贈呈の前夜には宿泊先で組み立てを行った。生徒達は悪戦苦闘しながらもなんとか予定の7台が完成した。翌日現地スタッフに迎えられて贈呈式が行われた。車いすには1台ごとに整備した生徒の氏名がシールで貼り付けてあり、生徒からひとつずつコメントを述べた。代表生徒より学校グッズの収益金の一部を添えて引き渡し完了した。代表の方より感謝状をいただき全員で記念撮影を行った。生徒達も感謝の言葉を聞き、自分たちのこれまでの活動をあらためて振り返ることができたようだった。



バスへの積み込み作業



感謝状



生徒の作成したステッカー

12月14日

最終日は午前中の短い時間を活用し、3日目と同様各科分かれて実施した。

造形の生徒たちは、二二八和平公園にて写生をした。滄海亭と呼ばれるあずま屋様の建物を中心に異国情緒あふれる風景を描いた。日本の建築物との違いなど現場ではじめて理解できるのがこうした実習の魅力でもある。ビジネスの生徒たちは、龍山寺、台北市郷土教育センター（剥皮寮）、紅樓、中山堂などを見学した。龍山寺では、台湾の人々の熱心にお参りする姿や、活気を肌で感じる事ができた。台北市郷土教育センター（剥皮寮）では、台湾の伝統教育と近代教育、台湾医療について展示があり、台湾における教育発展の歴史や学制の沿革、科挙制度について学習した。その時代の教室を模して作られた展示室が有り、生徒たちは、楽しみながら学習をしていた。ビジネスでは今回、見学行程をなるべく徒歩にすることにより、台北の町の人々の様子や活気を直に感じることができ、異文化の学習に役立った。



郷土教育センター



写生の様子



台北松山空港

（４）事後指導

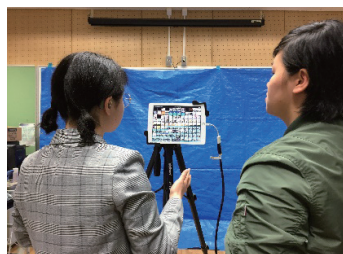
事前学習と同様に、事後学習も各科・各教科で進めている。

共通科目の美術教養で故宮博物院のレポートを作成したり、情報デザインで動画コンテンツを作成したり、体験したことを文章や映像で記録しながら学習を深めている。

造形は、冬休み中に水彩画を完成させ、この後は油彩画の制作につなげていく予定である。来年度1月に開催予定となっている日台美術交流展に向けて、生徒は意欲的に取り組んでいる。

ビジネスでは、台湾旅行中に購入した雑貨等を授業内で行っている商品販売活動で販売をする学習を今後行っていく予定である。また、台北の町を歩く途中で撮影したVR映像を元に来年度の文化祭展示で台湾体験コーナーを実施するべく準備を進めている。

生徒のアンケートからは「自国理解」「多文化尊重」「外国語コミュニケーション能力」の項目で肯定的な回答が増加していた。台湾研修旅行を軸に、国際理解教育と日々の学習活動を関連づけることにより、生徒が日常生活の中で日本の文化や海外に目を向けることができるようになったと思われる。



情報デザインの学習



水彩画生徒作品



ビジネス情報科事後学習

（文責：青柳泰生、内野智仁、武林靖浩、藤本裕美子、石井清一）

附属大塚特別支援学校の国際教育の取り組み

1. 本校の国際教育の特徴

附属大塚特別支援学校における生徒の国際教育の特徴は、身近な体験を通して外国語や文化に触れる機会をもつことであり、本年度も昨年度に引き続き、海外からの視察の受け入れの機会を活用して挨拶・交流をしたり、給食で海外の料理を食べたりする学習機会を設定した。また、中学部ではALTの先生による英語の授業を行った。教員の国際交流事業では、昨年度交流締結をしたインドネシア共和国のSPLB-C 私立チパガンディ特別支援学校（以下；チパガンディ特別支援学校）の教員2名が来校し、授業研究会と教材作成ワークショップを通じた交流を行った。

2. 中国北京市健翔学校との交流

平成30年（2018年）7月18日、中国の北京市健翔学校の生徒17名と教員・保護者が来校し、本校中学部の生徒と交流した。生徒は中国語で挨拶をしたり、一緒にダンスをしたり、作業製品をプレゼントするなどした。簡単な言葉によるやりとりだけではなく、ノンバーバルなコミュニケーションを図ることのできる歌やダンスを行うことで、一緒に楽しむ経験を共有できた。



3. 給食で海外の料理を体験

大塚特別支援学校では、平成28年（2016年）から、「オリパラ給食デー」を実施し、海外の料理を給食で食べる学習を行っている。栄養教諭（土田裕美教諭）がメニューを考案し、平成31年（2019年）1月で延べ23カ国の料理を給食で提供している。本年度は、ポーランド、タイ、トルコ、台湾、南アフリカ共和国の料理を給食で提供した。また、日本国内についても、奈良県や岩手県の料理を提供しており、日本の郷土料理に対する理解を深める機会となっている。



給食室の前には、これまで給食で提供した国を地図上に掲示しており、海外の料理が出る時は、児童生徒が確認する様子がみられる。また、給食には、その国の料理をわかりやすく説明した紙と小さな国旗が添えられており、児童生徒が給食を通して自然に海外の国について興味をもつことができるような工夫がされている。



4. チパガンディ特別支援学校教員との授業研究会を通じた教員間交流

本校は、昨年度より2年間の計画で、インドネシア共和国の SPLB-C（チパガンディ特別支援学校・私立）との国際教育研究交流協定を踏まえたに教育研究交流に取り組んでいる。2018年12月に SPLB-C の教員2名が来校し、本校の授業研究会及び、障害児基礎研究会（本校の根本副校長が幹事を務める）が主催する教材制作のワークショップに参加した。

授業研究会は12月14日（金）、17日（月）の2日間で行われた。14日は中学部・高等部、17日は幼稚部・小学部がそれぞれ午前中に研究授業を行い、午後に協議を行う。研究授業を行う学部以外の学部では幼児児童生徒の登校はないため、教員が研究授業を参観できるようになっている。また、本校の学校研究の助言者を務める大学教員からの講評もある。協議の持ち方は学部によってそれぞれ異なり、全教員が集まる協議で意見を交換する場合もあれば、グループに分かれて協議をする場合もある。このような授業研究会を SPLB-C の先生2名に体験して学んでもらうために、SPLB-C の先生方には授業研究会の2日間の日程全てに参加してもらった。

授業研究会の参加を通して、SPLB-C の先生からは、授業における教室環境設定・教材教具の工夫、授業研究会の協議の持ち方など参考になることが多く、自国に帰ったら自分の学校で他の教員に伝えて実践していきたいという感想がきかれた。

障害児基礎研究会主催のワークショップでは、実際に玉紐教材等を作成していただいた。個々の発達に応じて様々な教材を自分で作成することに感銘を受けたという感想をいただいた。





5. 中学部における英語の授業

大塚特別支援学校では、他の附属学校のようなかたちで English Room を設置してはいないが、ALT の講師による授業を中学部生徒に年間 10 回行っている（English Room の予算による）。生徒はローマ字表記された自分のネームカードを首にさげ、講師の先生と挨拶を交わしながら授業が始まる。10 回の授業では、数字や日付、曜日や天気 of 学習から始まり、色、食べ物、体の部位、そして簡単な挨拶の仕方を学習した。7 回目の授業では、食べ物カードを使った学習が行われた。ホワイトボードに食べ物のイラストが貼られると、生徒たちからは歓声が上がり、生徒たちが意欲的に授業に取り組めたことが印象的であった。講師の Ms. Lolita Yamamoto（以下＝リリー先生）から「What food do you like?」と質問を投げかけられると、生徒たちは少し困った様子であった。しかし、そこでリリー先生は慣れた様子で、生徒の立場になって「I like a Pizza.」と生徒を促すように指導する。数回のやりとりの後に、もう一度リリー先生が「What food do you like?」と質問すると、生徒は自信をもって「I like a Pizza.」と答えることができた。周りの生徒からは、「〇〇くん、すごいね!」と感想を伝える生徒もいた。このように、新しいことを学習するときはまず講師がお手本を示しながら生徒を誘導し、学習に安心感をもたせながら進められていたことが特徴的であった。

リリー先生が英語の授業で大切にしていることは、①生徒たちと楽しみながらお互いに学ぶこと。②講師は授業で日本語を使わないこと（教員は補助で日本語を使用してよい。）、③体を動かしながら英語を覚える（英語と動作を同時に行う）。④スピードを意識した反復練習、であった。特に、④スピードを意識した反復練習は、テンポよく英語を発声していくことが大切であることを私たち教員も学んだことである。中学部の英語授業は、生徒たちの関心のあることや日常で使用する言葉を題材に、英語を楽しく学べる機会となっている。



（文責：紅林仁・本間貴子・原田薫・深津達也）

国際的視野で物事を捉え、積極的に自己発信する桐が丘

1. 本校の国際教育の特徴

附属桐が丘特別支援学校では、国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲のある児童・生徒の育成を目標に掲げ、国際教育の実践を全校で行っている。

本校の国際教育活動としては国際交流協定を締結している韓国・社会福祉法人 SRC 附属広州セロム学校（以下、セロム）や台湾・国立南投特殊教育学校（以下、南投）及び国立和美実験学校（以下、和美）との交流事業（写真1、2）が挙げられる。この事業では、両国に児童・生徒の代表が赴き、交流活動や公共交通機関の利用体験、食文化を含む異文化体験を通じ、社会の様子やバリアフリー環境などの知見を広めている。また、事前指導を代表生徒だけでなく全体で行い、帰国後に中高合同国際交流報告会を設けることにより、代表生徒の国際交流体験が広く校内で共有される構図がある。

また、筑波大学の外国人研修生や留学生との交流（写真3）は13回を数え、昼休み・放課後を利用したイングリッシュルーム（写真4）の定着と相まって、児童・生徒の国際交流に対する前向きな姿勢を育む好機となっている。

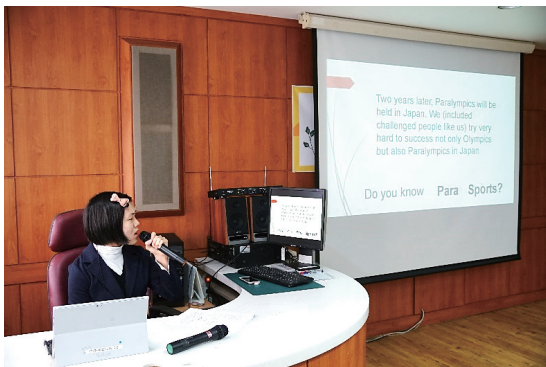


写真1



写真2



写真3



写真4

2. 活動報告

(1) 韓国 広州セロム学校訪問

期 日：平成30年11月26日～28日（27日にセロム訪問）

参加者：代表生徒1名（中学部第3学年女子）、引率者2名（副校長、教諭）

平成29年度は交流が実現しなかったため、2年ぶり、9回目の交流であった。今年度は、代表生徒を1名に絞り、引率者も2名とコンパクトな一団での訪問となった。

① 事前指導

期 日：平成 30 年 10 月 24 日（水） 2 校時

事前指導として、セロムと数年ぶりに Skype のビデオ通話を実現した（写真 5、6）。本校中学部 3 年の 10 名と先方の中 3～高 3 相当の 4 名が 30 分間交流した。互いにスライドを使い自己紹介し、韓国や日本の文化や食べ物等について会話した。先方の生徒には知的障害があり、ところどころ先方の英語科や国際交流担当の教諭が間に入った。限られた時間内ではあったが、和気あいあいとコミュニケーションをとることができた。

また、以前に代表生徒として訪韓した現高 3 生も休み時間に顔を見せることができた。帰国後も韓国についての学習を続けたこと、卒業後は大学に進学し韓国について学ぶことを報告し、喜ばれた。



写真 5



写真 6

② 移動

渡航にあたっては車いすを利用したため、空港で一旦自分の車いすを預け、空港の車いすを借りる形で移動した（写真 7）。現地では、都市部だったためバリアフリーが整っていた。鉄道には優先エリア（写真 8）や専用改札（写真 9）があり苦勞せず移動できたが、現地ガイドの帯同が 2 日目のみだったため、慣れない韓国語の表記やアナウンスと格闘しながらホテルや空港などへ向かった。その苦勞のおかげで、駅では見知らぬ人に「ついてきて」とエレベーターまで案内してもらったり、電車内では優先席に座っていた方が皆立ち上がり席を譲ってくれたり、かけがえのない経験ができた。



写真 7



写真 8



写真 9

③ 広州セロム学校訪問

11 月 27 日、セロムを訪問し、歓迎を受けた（写真 10）。代表生徒は英語で自己紹介と日本の文化（折り紙、茶道）のレクチャーをし、Skype で事前交流した生徒や先生方も実際に折り紙を体験した。先生方からは「堂々と英語でスピーチしていて素晴らしかった」と褒めていただいた。

その後、校内を案内され、主に小学部の授業を見学した。VR や乗馬の動きを模した機械を用いた動作訓練の様子や補助器具を用いて果物を切り食すといった生活に密着した授業（写真 11）、楽器に合わせて歌ったり演奏したりする音楽の授業などを見学した。また、セロムには SRC（サムヨック・リハビリテーション・センター）が併設されているため、病院内の様子も見学した。



写真 10



写真 11

④ 訪韓中の出来事

セロム訪問後は、韓国民俗村を見学した。朝鮮王朝時代の生活文化や民具、農機具の使い方を学んだ。また、綱渡りのショーや韓国の馬のショーがあり、言葉が分からずとも楽しむことができた（写真 12）。翌日は、景福宮などソウル市内を散策し、韓国の歴史や文化、現代の暮らしぶりを学んだ。

今回の訪韓の目的の一つでもあるバリアフリー状況について、エレベーターの広さや床の標識など、気付いたところを写真や動画の記録に残していた（写真 13）。生徒の印象に残ったものとしては、車いすマークが何種類もあったことと、電車内で妊婦優先席があったことを挙げている。これは色がピンク色で、妊婦以外が座らぬよう座席にぬいぐるみが置かれている（写真 14）。



写真 12

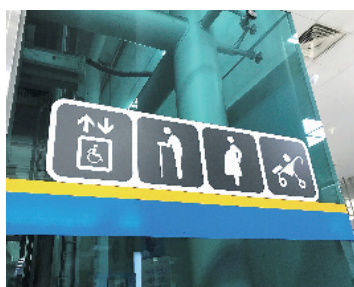


写真 13



写真 14

⑤ 代表生徒の感想

以下に代表生徒の感想を抜粋する。

- ・授業を行う先生、生徒の介助や手助けをする先生がそれぞれにいた。肢体不自由のある人と知的障害のある人が同じクラスで授業を受けていた。一人ひとりの障害や能力に合わせて授業をしていた。特に、映像や機械を使って体を動かす授業は魅力的だった。音楽の授業は1対1で行われていて、生徒ものびのびとして笑顔に満ち溢れているのが印象的だった。
- ・私は、見知らぬ国の文化に触れ、珍しい食べ物を食べ、異なる言葉を話す人々とコミュニケーションを取りたい。と同時に海外のバリアフリーはどうなっているのか自分の目で確かめたい。という思いから韓国交流を希望しました。最初は聞き慣れない「韓国語」に戸惑いも感じていましたが、最終日には耳から離れなくなっていました。日本語が通じず、韓国語が話せない私のコミュニケーションツールは英語でした。「英語なんて話せない」と思い込んで一歩後ろに下がっていましたが、「今回は自分から話せるチャンスだ」と思い、積極的に学校の授業で学んできた英単語や文法を組み合わせ向こうの学校の先生と会話をしました。ちゃんと伝わったときは嬉しかったです。今回改めて「英語の大切さ」に気づかされました。

⑥ 事後指導

期 日：平成 31 年 1 月 12 日（火）6 校時

事後指導として、中学部、高等部の生徒を対象に中高合同韓国・台湾交流報告会を本校体育館で行った。国際交流事業について教諭が概要を説明した後、代表生徒 2 名がスライドを使い、両国訪問について振り返った。その後の質疑応答も盛んに終わった。

また、代表生徒には両国の特別支援学校にお礼のカードを書く指導を行った。

（2）台湾 国立南投特殊教育学校・国立和美実験学校訪問

期 日：平成 30 年 11 月 6 日～9 日（7 日に南投、8 日に和美）

参加者：代表生徒 1 名（高等部第 1 学年男子）、引率者 2 名（校長、教諭）

平成 28 年度に両校と国際交流協定を締結し、昨年度に引き続き二度目の生徒同士の交流をした。今年度は、韓国訪問同様、代表生徒 1 名、引率者 2 名での訪問となった。

① 事前指導

期 日：平成 30 年 10 月 29 日（月）放課後（15：20～16：00）

今回初めての試みとして、和美と Skype のビデオ通話を行った（写真 15）。代表生徒のみを対象に事前指導を行うのではなく、代表に選ばれなかった生徒にも国際交流協定校を身近に感じてもらう狙いがあった。

両校教員による打ち合わせや前日の通信確認を経て、本校高等部第 1 学年 6 名と和美の第 10 学年（高 1 相当）37 名が放課後 40 分間交流した。こちらはスライドを使い自己紹介し、先方は数名の自己紹介のち台湾についての質問に答えてくれた。スライドや台本を準備しての交流は、どちらかというと発表に近いと、生徒は緊張してしまいなかなか会話を楽しむところまで達しなかった。しかし、後半になり先方の話を聞いたり台湾について質問したりする段になると、一転リラックスした雰囲気になった（写真 16）。和美の生徒達の "Welcome to Taiwan!" という結びの言葉に、学年全体が台湾を身近に感じる事ができた。

今回は、生徒にとって身近な「自己紹介」をテーマとしたが、いずれは相手国について調べたり、あるいは準備を必要としない即興での会話をしたりできるようにしたい。



写真 15



写真 16

② 移動

訪台も車いすを荷物として預け搭乗した（写真 17）。現地では、都市部だったためバリアフリーが整い、新幹線には車いす専用車両があり（写真 18）バスも車いす対応だった（写真 19）。しかし、韓国と同様に初日は現地ガイドの帯同がなかったため、ホテルやレストランへの移動に苦戦した。



写真 17

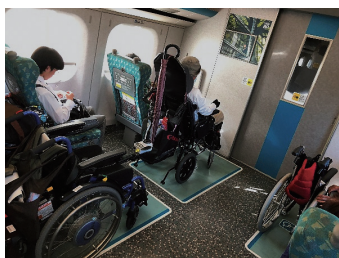


写真 18



写真 19

③ 国立南投特殊教育学校訪問

南投には主として知的障害のある児童生徒が在籍しているが、肢体不自由を併せ有する児童生徒も在籍している。重度・重複障害者を対象に校内で理学療法や作業療法が行われている。小学部2学級、中学部2学級、高等部6学級の計10学級という規模だが、校舎は大きく設備も充実している。高等部は職業訓練が中心で、清掃、園芸、ケータリング、軽作業等の授業がある。

バリアフリーの徹底された新しい校舎で生徒と昼食をとり（写真20）、リラクゼーションルームや視線制御のPCマウス、ASUS社の移動型ロボットZENBO（写真21）などの最新設備を見学した。

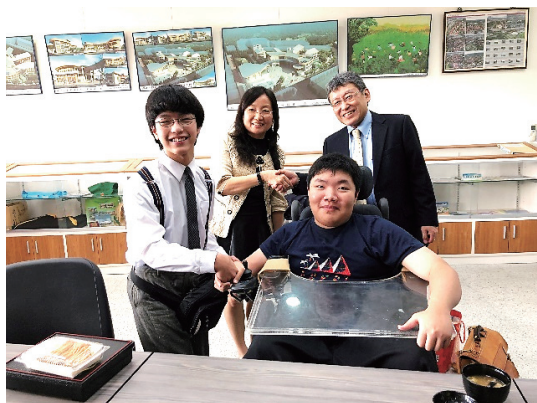


写真 20



写真 21

④ 国立和美実験学校訪問

和美は小・中・高合わせて500人超の児童生徒が在籍する肢体不自由特別支援学校である。事前交流をした10年2組（普通級）の授業に肢体不自由を有する生徒が加わる形で交流した。代表生徒が東京の名所や日本の伝統的な遊びについて紹介し、たいへん盛り上がった（写真22）。和美からは自己紹介、台湾の名所紹介、歌の披露があり、漢字、英語、日本語で書かれた名刺をもらった（写真23）。



写真 22



写真 23

⑤ 代表生徒の感想

以下に代表生徒の感想を抜粋する。

- ・約5年前に日韓学校間交流代表生徒の一員として大韓民国を訪れた際と比較すると、当時は最年少だった事に加えて韓国語に長けた先輩がいらっしゃった事もあり、終始受け身形で主体性に欠け、良くも悪くもスケジュールに沿った行動に徹していたが、今回の交流では一人で交流代表生徒の重責を担うことができ、桐が丘の生徒（あるいは日本の学生）の代表として行かせていただけるんだ、という喜びと責任を常に念頭に置きながら行動することができ、同時に主体性と積極性が持てた。
- ・初対面の方と英語などでコミュニケーションを取るのハードルが高いように思っていたが、想像していたよりは落ち着いていて、今後の自信に繋がった。また外国語学習の必要性を再認識し、今後の2020年東京オリンピック・パラリンピックや大阪万博の際や、グローバルな労働力としてより多くの外国の方を迎えるであろう日本人として、町中で困っていそうな方がいたら声をかけたり、普段から日本を訪れた方たちに恥じることもないよう行動することを心がけたりしようと、気持ちを新たにすることができた。
- ・引率をしていただいた先生方は旅慣れている印象で、先を見通した行動は大変参考になった。同時に気持ちにゆとりがあり、渡航先にもかかわらず、他国からの渡航者と気さくに会話されている姿は印象的だった。また以前は消極的な考えだったが、空港の手続きなどの基本的な出入国の手順を学んだり、先生方のそうした姿を見たりしているうちに、自分も将来は世界を旅してみたい、国際的な活躍がしたい、と思った。

⑥ 事後指導

(2) 台湾⑥事後指導の項目に同じ。

(3) 高等部生徒と筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流

平成30年12月4日、高等部生徒と筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流を、総合的な学習の時間において実施した。留学生との交流は今年度で13年目となる。

国際交流実行委員の生徒を中心に、9月25日から11月27日まで事前準備の時間を9回持ち、交流を計画した。10月23日にはポリコムをつないだ打ち合わせを設け、先方に企画の内容を伝えた(写真24)。第1学年は11月20日に附属坂戸との交流を終えて、27日の事前準備に加わった。

今年度はインド、モンゴル、ブラジル、ペルー、クロアチア、マラウイ、ナイジェリアから7名を予定していたが、当日インドの方が欠席し、6名を迎えた。12:40から各教室で給食を一緒に食べていただいた。第1学年IIコースでは地理の授業でブラジルについて学習したので、ブラジルの方と給食をとり、自由な会話を楽しんだ(写真25)。教科書や本でしか知らない国が、その国の方と実際に話すことで、生徒たちにとって身近な国の一つになったように感じられた。

その後、5・6校時では体育館を使い交流した。前半は留学生の自己紹介や各国の文化・食べ物などの紹介スライドを見た。後半は留学生ペアが3グループをローテーションで回る形でディスカッションを行った(写真26)。ディスカッションのテーマは「バリアフリー」、「桐が丘の授業」、「課外活動」とした。日本のバリアフリーや特別支援学校について、公共交通機関の利用方法や自立活動、手だて、配慮、自分達が所属するバンド部やスポーツ部等について説明し、各国を取り巻く状況についても情報交換することを狙った。いずれも生徒達にとってはなじみのある事柄であるが、英語でスライドを準備し、発表に備えるのには苦勞していた。



写真 24



写真 25



写真 26

以下に生徒の感想や反省を抜粋する。

(今回の交流を通して知ったこと)

- ・ブラジルやペルーの都市部ではバリアフリー化は進んでいるが、電動車いすは少ないこと。
- ・障害者という存在が、日本以上に受け入れられていない国がいまだ多くあること。
- ・政府からの支援があまりなく、学校などから受け入れを拒否される障害者も多いこと。
- ・文化祭 (school festival) が意外と通用しない。どうやら文化祭という行事がないようだ。

(今回の交流を振り返って)

- ・英語で返事をするを考えすぎて黙ってしまった。
- ・グループに分かれた後の交流は意見交換などできたが、全体としてゲストを楽しませるムードが足りなかったかもしれない。
- ・用意した台本通りに拍手したり、“welcome” といったりするなどの歓迎はできたが、忙しいなか来ていただいているのに心からの歓迎ができていたかは自信がない。

3. 児童・生徒の変容

今年度の国際教育活動を振り返ると、国際交流充実事業も留学生との交流も、生徒が実際のコミュニケーションを通して国際的な視野を得ることができ、成功したといえる。

韓国及び台湾の特別支援学校との国際交流充実事業の代表生徒に選ばれた生徒はいずれも真面目で努力家ではあるが、こと英語でのコミュニケーションとなると一歩引いてしまうところがあった。しかし、海外で実際に英語を用いて人と触れ合ったことで、積極的にコミュニケーションを図り、そのために主体的に学習する意欲が湧いたと述べている。また、車いすで海外渡航し、通訳ガイドに頼らず公共交通機関を利用してホテルやレストランへたどり着いた経験も自信につながったようだ。帰国後の報告会では二人とも堂々とプレゼンテーションを行い、他生徒からの質問に答えており、その姿はよき手本、よき刺激となった。

高等部生徒と筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流においては、韓国及び台湾交流事業の過去の参加者が積極的に計画に加わり、当日も怯まずコミュニケーションを図っていた。しかし、全体での反省では「英語でプレゼンテーションを準備できた」、「知らなかったことを知り、視野が広がった」と満足するのではなく、「プレゼンテーションや会話の質」や「ゲストを歓迎できたか」という点まで見据えて振り返りを行うことができた。これはこれまでになかった観点で、本校で国際交流経験が積み上がったことで得られたものだろう。

同じ観点で韓国及び台湾との交流を評価するなら、来年度以降はさらに質の高い事前交流、事後指導を生徒と共に模索したい。実際に海外渡航できるのは代表生徒の数名であることを鑑みると、生徒全体へ効果を及ぼす機会は事前、事後指導しかないためである。

附属久里浜特別支援学校の国際交流

1. 本校の国際教育の特徴

本校は、毎年、海外から多数の視察を受け入れており、本年度は、6つの機関、団体から50名を超える方々が来校された。授業や活動の様子を見ていただいたり、時には子供たちと一緒に遊びや活動を通して触れ合ったりする機会となっている。教師にとっては、本校の子供たちや学校、そして自閉症教育の実践について紹介し、感想や意見をいただく機会ともなっている。また、姉妹校との間で定期的に授業研究会を実施すること、海外からの依頼に応じて受け入れ型の研修を行うこと、そして本校教職員が海外の機関等で研修を受け学ぶことなどを通じて、海外の人と交流し、文化の理解を深めたり、グローバルなコミュニケーション力を高めたりしている。

2. 活動報告

(1) アメリカ FITT (Family Implemented TEACCH for Toddlers) の研修報告

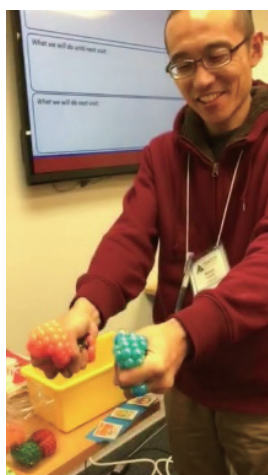
平成30年12月11日(火)～13日(木)の3日間、アメリカノースカロライナ州ウィルミントンのTEACCHセンターで本校の3名の職員がFITT (Family Implemented TEACCH for Toddlers) の研修を受けた。



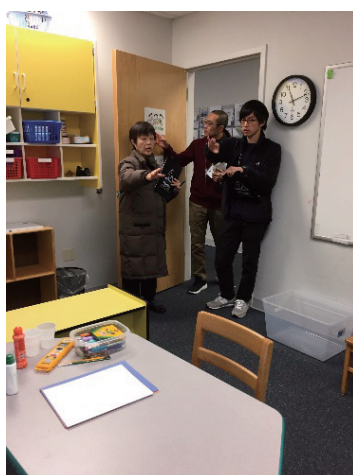
FITT プロジェクトスタッフと記念撮影

FITT（フィット）とは、ノースカロライナ大学 TEACCH において、実践をベースに、研究開発されている自閉症幼児（就学前）の家庭療育及び生活支援のことである。主な特徴として、コーチング理論に基づき、親と協働して取り組むことを通して、子供の成長が期待されるだけでなく、親の精神的ストレスが減少することが挙げられる。

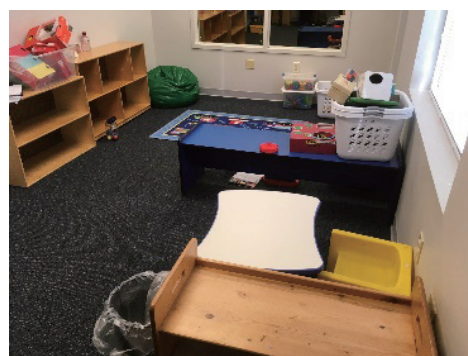
昨年度、本校の教職員 8 人がウィルミントン TEACCH センターに訪問し、FITT の基礎となる自閉症の特性、構造化、FITT の概要等について学んだ。今回は、3 人の教職員が FITT プロジェクトスタッフに、直接、講義や演習を受け、理論やアセスメントの方法、プログラムの内容について、具体的に学んだ。さらに、子供、母親、スタッフによる 3 つのセッションを見学しながら、子供との関わり方、保護者への説明の仕方、アセスメントの仕方などを学ぶことができた。24 ある全てのセッションのマニュアルを手に入れることができ、同行した大学の先生や FITT に関心のある先生と翻訳チームを作り、日本で活用できるようにしていく予定である。



使用する教材と
そのねらいを事前に確認



教材の配置や場の設定の確認



実際のセッションを見学
(人は撮影できない)

本校の家庭生活支援は、教師と保護者と一緒に、子供の家庭や地域生活での課題を明らかにした上で、教師が家庭等に出向き実施している。個々の評価やニーズは高いものの、家庭でのアセスメントの方法や学校の支援プログラムとしてまだ確立していない。本校の寄宿舍と連動しながら、本校の子供たちだけでなく、広く自閉症の子供たちの家庭生活支援のプログラムとして発展できるように、研修の成果を生かしていきたい。



講義と演習



チャペルヒル TEACCH センターの前で

(2) 受け入れ型研修：中国廈門（アモイ）市日本特別支援教育視察団

平成 30 年 6 月 12 日（火）、中国福建省南部の廈門市から日本特別支援教育視察団が来られた。特別支援学校の教師や自閉症に関わる医療機関の方々からなる 12 名の視察団に対して、本校紹介、学校見学、授業参観、質疑応答、授業研究会の内容で研修を行った。

授業参観では、幼稚部の朝の会、小学部の音楽などの授業を見学していただいた。幼稚部年長組の朝の会では、幼児が名前を呼ばれて返事をしたり、自分の顔写真が貼ってある円柱をボードの穴に入れたりする様子を笑顔で見学され、幼児の活動に合わせて拍手をしたり、幼児からのハイタッチに応じたりしながら、授業を一緒に盛り上げていただいた。小学部の音楽では、「先生と一緒に音で遊ぼう」の授業で、1 年生の児童が教師と一緒に歌を歌ったり、ツリーチャイムやフィンガーシンバルの楽器で活動したりする様子を熱心に見ていただいた。



年長組 朝の会の見学



1 年生 音楽の見学

授業研究会では、小学部 1 年生の音楽の授業を取り上げた。事前に中国語に翻訳した指導案を準備し、視察団の方々が、児童の実態、授業の進行、教師のねらいなどを参照しながら授業を見学し、後の授業研究会で質疑応答や意見交換が活発に行われるようにした。実際に授業研究会が始まると、廈門市の先生方は、本校教師の授業評価を聞きながら熱心にメモを取り、積極的に挙手をして詳細について質問をされた。質疑応答では、児童一人一人の本時のねらいに関すること、楽器の取り扱い方の指導に関すること、特別支援教育の教師の資格や経験についてなどについて、中国と日本の教育実践の類似点や相違点も含め、活発な意見交換を行うことができた。



授業者による評価の発表



廈門市の先生からの質問

今回の研修は、本校の教師にとっても学びの場となった。発表者は、始めは通訳に向かって発言していたが、徐々に廈門市の先生方に向けて話し掛け、反応を見ながら話を進めるように改善できた。また、ボディランゲージを用いたり簡潔な表現でゆっくり説明したりしたことで、廈門市の先生方の注目や傾きが増え、互いの目を見ながら、コミュニケーションを深めることができた。

(3) 海外からのお客様との交流

平成 30 年 6 月 7 日（木）中国 広西幼児師範高等専科学校日本特別支援教育視察団

5名の先生方に、本校教育や施設等について、実際の幼児児童の授業も見て頂きながら説明を行った。幼児児童は、海外からのお客様を振り返って見たり、挨拶に応じたりすることで交流していることが多いが、ある幼稚部の男児は、玄関で先生方とお会いした際、お母さんに促されて恥ずかしそうに「ニイハオ」と中国語で挨拶をしていた。先生方が喜んで拍手を送ると、照れくさそうに笑いながら、教室の方へ走って行った。授業参観の後は、広西の先生方から教材教具や小学部卒業後の進路について複数の質問を受けた。教材教具については、広西では、既成品を買って使っているとのことで、本校の幼児児童の実態やねらいに合わせ1つ1つ手作りしている教材教具をじっくりと見られ、説明を聞いて感心されていた。



小学部玄関前で記念撮影

平成 30 年 6 月 12 日（火）中国 廈門市特殊教育関係者団

受け入れ型研修に来られた 12 名の先生方と、幼稚部・小学部の子供たちも生活や授業の参観を通して交流を行った。幼稚部では、本校幼児が、後方で見学をしている視察団の方々を意識して、授業でいつもより張り切ったり、自分が上手にできたことを視察団の先生方に伝えたくて、自らハイタッチをしに行ったりするなど、積極的に関わる様子が見られた。



先生方とハイタッチや拍手をする幼児

平成 30 年 8 月 30 日（木）中国 北京より研究者視察団

平成 30 年 10 月 11 日（木）中国 湖北省教育庁の特殊教育研修団

当日は、運動会の予行練習を本番と同じように、テントの中の椅子に座って、お客さんとして見学していただいた。通訳を入れて、22 名の参加であった。運動会までにまだ時間があり、十分な練習はできていなかったが、一生懸命に平均台を渡ったり、目的に向かって全力で走ったり、友達と力を合わせてのびのびと演技している子供たちの様子を見ていただいた。いつも予行にはお母さんたちが来られるが、この日は、お母さんたちだけではなく、たくさんのお客さんの前で披露することになり、時々、大きな拍手も起こり、嬉しそうにしている子供もいた。研修団の方々は、本校の教師が手作りした様々な用具や小道具、子供たちが生き生きと活動するための場の作り方に興味をもたれていた。



テントの下で観客として見学

平成 30 年 12 月 4 日（火）JICA 横浜視察団

国別研修マレーシア「LEP2.0 教育省特別支援教育人材育成」の研修プログラムの 1 つとして、本校を訪問された。教育省特別支援教育課の方や現場の先生など 10 人がお見えになった。子供たちの様子や作品、教材・教具に関心が高かった。

平成 31 年 2 月 1 日（金）韓国 国立特殊教育院より視察団

隣にある国立特別支援教育総合研究所の国際シンポジウムに係る韓国の先生方が、シンポジウム前に本校を訪問された。本校の小学部では毎月、学部集会を行っているが、担当学年の子供一人一人が司会やパソコンの操作などの役割をもって進行している。誕生日の子供たちをお祝いしたり、集まりの歌や季節の歌を歌ったり、修学旅行や宿泊学習、遠足など体験したことを発表したりしている。当日は、2、3 月生まれの子供たちが前に出て、スクリーンに映るケーキのろうそくを消したり、みんなと一緒に誕生日の歌を歌ったりした。その様子を見ていただき、一緒にお祝いしてくださった。見学後、「自閉症の子供たちが楽しく集会に参加しているのが印象的であった」と感想をいただいた。また、同研究所の李先生が、この訪問に合わせて本校の学校紹介 DVD を韓国語に訳してくださった。



小学部の学部集会を見学

5. 各附属学校のイングリッシュルーム活動

附属小学校

留学生との交流会

本年度、各学年、各教科部から留学生との交流でやってみたいことを希望してもらい、活動を行った。学年としては、2年、3年、家庭科、音楽の授業で交流会を行った。

☆家庭科部より

テーマ：留学生の出身国のお正月（またはクリスマス）の過ごし方や食べ物を知ろう。

日本のお正月の過ごし方や食べ物について英語で留学生に説明し、知ってもらおう。

対象クラス：1部5年、4部5年

日時：11月29日（木） 1部5年〈3・4時間目〉、 4部5年〈5・6時間目〉

活動：お正月やおせち料理について、絵を使いながら英語で説明する。飾り切りに挑戦して、みんなで試食する。



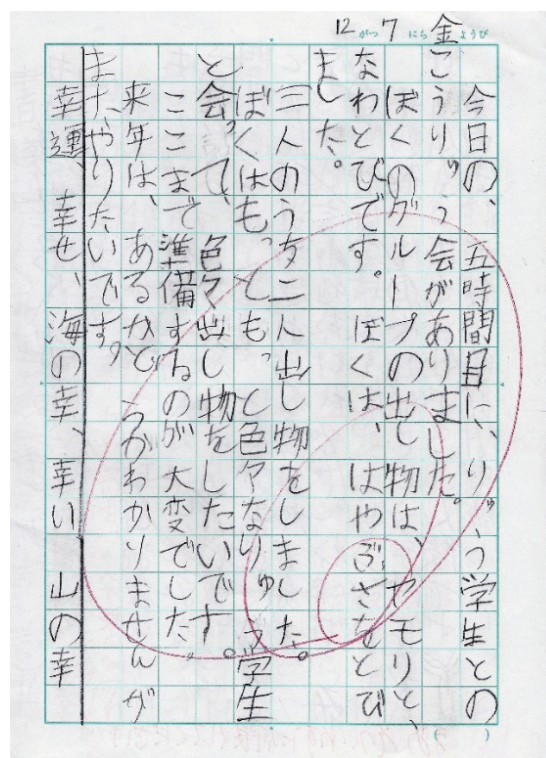
☆2年部より

テーマ：準備したパフォーマンスを披露することで、留学生と交流しよう。

対象クラス：2年部 125人

日時：12月7日（金） 13:00～14:10

活動：各国の紹介をしていただき、2年生がグループで考えたパフォーマンスを披露する。



附属中学校 イングリッシュルームの活用報告

1. 基本的には例年通り実施

- ・前期は週1回（火曜日）、後期は週2回（火・水曜日）、昼休みと放課後に開設。
- ・開室中は通常授業の Team-teaching の時間担当の ALT 2 名が常駐。
- ・生徒は部屋の扉にある表に名前を記入して予約する。
- ・夏休みまでは3年生を2名ずつ割りふり、全員に体験させる。
- ・アメリカ短期留学プログラム参加希望者は2回利用していることを応募条件にする。
- ・来室した生徒を毎週記録しておく。
- ・1年生の利用は後期からとする。
- ・アメリカ留学短期プログラムの写真や参加者レポート、その他国際関係のチラシやポスターを部屋の外に展示している。

今年度も多くの生徒に利用されてきた。アメリカ短期留学プログラム参加者決定後は、彼らの利用が増えたが、それ以外の生徒もよく来室していた。

後期からは1年生の参加も増えた。授業での発表活動の練習に訪れる生徒もあり、活用の幅が広がっている。3月発行のPTA会報に、リピーター生徒2名へのインタビューが掲載されることになり、English Room 利用の利点や来室を促すメッセージを生徒と保護者に伝える予定である。



2. 感想からみた生徒の変容

- ・話題を思いつかなくても、先生が何か話しやすい質問をしてくれる。うまく話せなくても、日本語を教えたり、絵を描いたりして、こちらのペースに持ち込めばいい。以前より英語で話すことに抵抗がなくなってきた。アメリカ留学に申し込みたくて行き始めたが、意外に面白かったので今も続けて来ている。 (2年)
- ・日常で英語を話す機会や、授業中 ALT の先生方と一対一で話せる時間は少ないので、一人でもきちんと話せるようになりたいと思い、基本的に予約できる日は毎日予約している。最初は全然話せなかったが、間違えても先生がフォローしてくれ、正しい表現を丁寧に教えてもらえ、話しやすくなった。授業で話さないような話題でも気軽に話せる。あとはもちろん無料で毎週行けるのがいい！ (3年)
- ・英語に不安があっても、得意な友達と行くと、わからないことを聞けるので大丈夫です。 (2年)
- ・一度行き始めれば、次から次へと自分が話せるようになっていくのが実感できます。一度まず勇気を出して行ってみてください。先生方の出身地の話も聞けるので、留学に興味のある人は絶対行った方がいいと思います。 (3年)

附属学校のイングリッシュルーム活動について

(1) 附属高等学校

① 活動内容

2013 度から始まった「イングリッシュルーム」は、今年度 6 年目を迎えた。前期は毎週木曜日の放課後と金曜日の午後に、後期は金曜日の午後、マクレイ先生（附属中学校のイングリッシュルームも担当）にお越しいただいた。前期木曜日の放課後は、各 SGH プログラムに参加する生徒に対して、英語による研修を実施した。前期および後期の金曜日の午後は、昼休み、午後（授業のない 3 年生対象）、そして放課後の 3 部に分けて実施した。1 コマ 20 分に設定し、事前予約を含めた先着順で生徒が自主的に参加した。目的や学年を問わず幅広く誰でも参加できる場として設定している点が大事であると考えている。今年度「イングリッシュルーム」を活用した生徒の目的は以下のとおりである。多種多様な用途で活用されていることが理解できる。

- ✓ 国際交流事業への参加者選考へ向けた準備（1 年生）
- ✓ 英語表現 I の授業で行うスピーチの原稿の添削（1 年生）
- ✓ 海外留学や国際交流事業への参加が決定した生徒の準備（1～2 年生）
- ✓ 大学入試に向けた英語のエッセイの添削や英語面接の指導（3 年生）
- ✓ 英語検定試験等の資格試験対策（1～3 年生）
- ✓ 英語の運用能力を伸ばすため（1～3 年生）

② 生徒からの反応

個別にじっくり対応してくれるため、エッセイの添削やスピーチの準備などを必要としている生徒には非常に好評であった。国際交流事業（国際シンポジウムなど）に参加する生徒は、英語運用能力のみでなく幅広い話題に対応する知識や柔軟性が必要である。このため、マクレイ先生は毎回異なるトピックを提示し、楽しくも時折鋭く切り込んでくださった。参加した生徒達からは、「マクレイ先生のおかげで、授業課題のスピーチが上手にできた」、「授業内だけでは英語を話す時間が限られているので、良い機会になっている」、「短期留学に行くための準備として役立っている」、「進路の相談や様々な話題について英語で伝える良い機会になった」、「入試の英語面接に向けて練習ができ、自信になった」という感想があった。



③ 今後へ向けて

「イングリッシュルーム」については、ポスターを掲示することで案内をしている。また、マクレイ先生に 1 年生の英語の授業にお越しいただき、英語を学ぶ重要性や「イングリッシュルーム」でどのようなことができるかについてお話しいただいたこともあった。その結果、年間を通してさまざまな需要を満たすために多くの生徒が利用し、特に昼休みは予約が埋まる状態も少なくなかった。（H31. 2. 12 現在イングリッシュルームへの自主的参加延べ人数は 54 人）今後、英語関連の資格試験の受験者数は多くなることが予想される。授業を通して英語の発信力を高めることは必須であるが、授業外でも生徒が個々の目的に合わせて英語を使用する場があることがとても大事であり、「イングリッシュルーム」がもたらす役割はとても大きいと言える。

English Room：日常活動および海外研究発表とその先の支援

1. 活動報告

本校のイングリッシュ・ルームは2013年にスタートした。月に2回ほど、放課後3:30～5:00に東大大学院の留学生に来てもらい、それぞれのご専門について語ってもらったり、語学部が英語イベントのコーチを受けたりしている。(もちろん、希望者が参加することも可能である)

また、台湾・釜山への生徒派遣をする前に、現地で発表する研究プレゼンテーションの原稿チェックやプレゼン・コーチもしていただいている。

中3のテーマ学習や高2の課題研究のScience Dialogue(講座の前半では科学系研究者のプレゼンを伺い質疑応答、後半では自分のテーマを決めて英語でプレゼン活動)。その際のコーチや、最後のプレゼンテーション大会のコメンテーターもしていただいている。登録されている方が6～7名おり、それぞれがプレゼン経験も豊富で、しかも英語を第2外国語としている方が多いので、学習者の英語学習の苦勞も心得ており、英語のティーム・ティーチングでネイティブの方から教わるのとは違った利点もある。

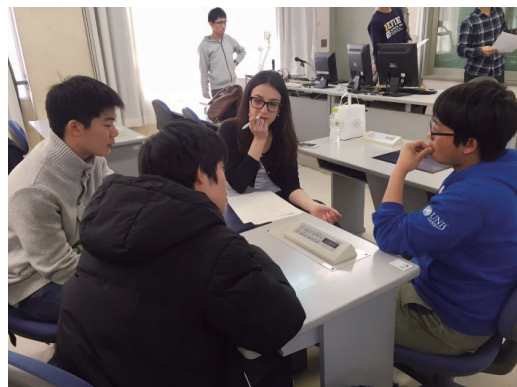
2. 生徒の感想

今回の釜山派遣生徒のプレゼンテーション・リハーサルでイングリッシュ・ルームの講師の方々の指導を受けた、生徒たちの感想をあげる：

- ・例えば一通り発表してみて説明が過剰な所や足りない所などを指摘してもらえたし、そのトピックに関する事前知識が全くない人が聞いても飽きない・難しくない物であるかどうかなどが確認できました。スライドをもっとこうした方がいいといったことや、発表の仕方自体(アイコンタクト、ジェスチャー、イントネーションなど)にも助言をいただきました。
- ・全体を通しては、基本的なものから応用的なものに至るまで、幅広くご指摘頂きました。中でも特に有り難かったのは、説明が英語として分かりにくいところ(英語の文法的には正しく、また日本人が読むには違和感がないが、英語話者には不自然に感じられるところ)を丁寧に指摘して下さったことです。それから、言語学の専門用語などの慣れない単語についても、アクセントが間違っているところなどを指摘して頂くことができ、直前に完成した原稿でありながらも大きな進捗を得られました。他にも英語話者ならではの指摘をたくさん頂くことができ、有意義な時間を過ごせたと思います。



プレゼンの練習を見ていただく



テーマについてアドバイスを受ける

(文責：研究部・国際交流担当 八宮 孝夫)

楽しい英語活動と SGH 校としての活動の両立を目指して 2018-2019

1. 活動報告

2013 年より、本校ではイングリッシュルームの活動として、昼食時の English Lunch（イングリッシュランチ）と、放課後の English Salon（イングリッシュサロン）に、週 1 回取り組んでいる。

English Lunch …… 12：30 ～ 13：10 火曜日 40 分

English Salon …… 15：40 ～ 17：40 火曜日 120 分



【ハロウィンパーティーの様子】

English Lunch では、ALT と昼食をとりながら英語に親しむ機会を設けている。生徒も教員も各自弁当を持参し、会話のテーマは特に決めずに自由に話している。English Salon では、映画鑑賞をしながら ALT との会話を楽しみ、時には英語検定に向けた会話練習を行ったり、ハロウィンやクリスマスといった季節行事を開催したりしている。

本校の「イングリッシュルーム」活動は主に本校校舎 B 館の各階に設けられている学習スペースで行われ、English Lunch、English Salon の両方において、気軽に立ち寄り、参加することができる。また、総合学科であることの強みを

活かし、時には農業科や家庭科といった専門教科の施設をお借りし、海外の食文化について実際に調理をすることを通して学ぶ活動なども行っているのが特徴である。

2014 年にスーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定されて以来、授業内外の様々な場面において英語でのプレゼンテーションに生徒が取り組む機会が増えたほか、英語検定をはじめとする外部英語検定試験へ挑戦する生徒の数が急増した。これに伴って、① SGH 関連開発科目における英語プレゼンテーションの原稿添削・指導、②本校主催 ESD シンポジウム及び全国 SGH 校生徒成果発表会に向けた発表資料作成・指導、③本校を訪れる海外生徒との交流の場の提供、④外部英語試験の対策といった活動を注力して行っている。

一方で課題も多くある。特に放課後の時間帯に開催される English Salon では、部活動や委員会活動と重なり、希望しても参加できない生徒が少なからずおり、参加者が固定化する傾向も見られる。また、英文報告書やプレゼンテーションなどに関しても、多くの授業やプロジェクトで生徒に課されているものの、いつが締め切りなのか、英語科として把握しきれていない部分があり、せっかく英語母語話者に添削・指導をしてもらえる機会があるにも関わらず、活かしきれない場面が見られる。より効果的なイングリッシュルームの運営ができるよう、校内の国際教育推進委員会で更に検討して行きたい。



クリスマスクッキングの様子
フィリピン大学附属高校の生徒・教員とともに

2. 児童生徒の感想

- ・委員会や部活で忙しく、行けないときがあるのが残念。 (2 年男子)
- ・英検の 2 次試験対策をしてもらい、落ち着いて試験に臨めた。 (1 年女子)
- ・授業の課題で、たくさんアドバイスをもらい、完成度を高めることができた。 (2 年女子)

(文責：福田 美紀)

附属視覚特別支援学校のイングリッシュルーム活動

1. 活動報告

【幼稚部・小学部】

2018年度は参加希望者が少なかったが、「少人数、参加者は全員英語学習に強い興味を示している」という特徴を生かして、「自立活動と連動した英語クラブ活動」を本年度のテーマとした。その「新たな試み」を報告したい。

Apple Club：

参加者は年少1、年中2、年長3名で、うち4名はリピーターであった。幼稚部も、日々の生活に沿って、「数える・マナー」をテーマに、月1回金曜日にクラブ活動を開始した。毎回英語で出欠を取り、渡された名札を“Thank you.”とはっきりと挨拶して受け取る。幼児の自主的な要望に沿った「アップルクラブ公園巡り」を親子で楽しんだ。保育室の遊具の配置に合わせて絵カード（音声ペン対応）を並べた「地図」を片手に順番を待ち、英語で言えた遊具で遊ぶ。各自で回数を決め、数えて遊んだ。こうした活動の成果は、「保育や遊びの中で人数や色を英語で発話したり、出欠調べに英語で答えたりする姿が見られた」「学んだ挨拶など自信をもってできることが楽しそう」「英語の歌に興味が出てきた」など、教諭や保護者からの感想として届いている。

Blueberry Club：

参加者は、全員クラブ活動経験のある2年生3名で、月2回、月曜日に活動した。小学部のテーマは、「1日の生活」とした。アメリカの小学校生活を示す絵本を参考に、“Are You Sleeping?”のメロディーで「1日の生活」の替え歌を作詞。歯磨き、整髪、朝食、通学など、生活用品の実物や糸電話などを使用して「生活体験の具体化」を試みた。その都度関連の英語の歌を学び、「挨拶・じゃんけん」など遊びも取り入れた。6月からは「ABC学習」を取り上げ、「イングリッシュルーム活動」初の試みとして各自「絵辞典」を作成した。A～Zを頭音とする単語のぷっくりシールや切り抜き絵をB5大の画用紙に貼って紐で綴じていくものである。各文字の「名前と音」を学ぶ為「パクパク・アニマル」（「鍋つかみ」を改良した教材）を作製。“th/l/f/v”など「英語の音の具体化」にも、楽しく遊びつつ、有意な効果が見られた。この「絵辞典作成」の効果は大きく、3人揃って一番楽しかった活動にあげたのが、“ABC Touch and See”という視覚障害児用の絵本を読んだことであった。「あっ、小文字のbとdは反対だ！」など未学習の小文字にも興味を示した。「家庭でも親子でシールを探して貼った」「マイ絵辞典は宝物！」など、児童、保護者から同じ感想が寄せられた一方、「盲の児童への配慮と工夫がもっと必要」との指摘もあった。次の課題である。



小学部 Blueberry Club 活動の様子

Coconut Club：

参加者は4年生3名、3年生1名で、「英語大好きリピーター」たち。本年度から授業でも「外国

語活動」が導入された学年の為か、「ABC 文字」への興味も更に増し、「絵辞典」作成を夢中で楽しんだ。“C/G”に関しては、ページをデザインテープで斜めに2分し、“hard/soft”に分けて貼ったり、学習文字も「名前のイニシアル」の順にするなど、Blueberry Clubとは違った導入法を試みた。3、4文字の単語は、スペリングも言えるようになり、1学期には聞き覚えで歌っていたクラブソングも、“Cabbage, Carrot, Cucumber”の3番まで文字で読み、歌えるようになった。「母音字は右肩、k～tは3の点、その後は3と6の点を示すように画用紙の隅が切ってあるのが分り易い！なるほどね。Wは別だ！」と「絵辞典」の意図をよく理解している点字使用組。「子供が学んだことを毎回楽しそうに教えてくれるのが嬉しい」と、家庭でも家族全員でシール貼りをしている様子が、表紙にまでぎっしりとシールが貼られた「マイ絵辞典」に表れている。

(文責：股野儼子)

【中学部】

① 活動報告

中学部の希望者を対象に、放課後（月曜 15：20～15：50）実施した。普段授業でも接しているALTに講師をお願いしている。学年別の実施とし、時期や学年に応じて話題を設定した。例えば、1年生の初回は各自の自己紹介をもとに話を広げていった。また、2年生と3年生は、夏休み前には夏休みの予定、文化祭後には文化祭期間中に何をしたか、冬休み前には年末年始の過ごし方を話題にした。できるだけ生徒が英語だけで会話することを目標にしつつ、適宜日本人英語教師が助けながら進めた。1月末現在の実施回数は8回、参加延べ人数は36人と、昨年度より減少してしまった。

生徒の感想からは、授業とはまた別の場で英語を使うことで、新たな知識を得たり、コミュニケーションの楽しさを学んだりといった経験ができていることがうかがえる。また、意欲の高い生徒は、英語に触れる機会を増やせることや、授業よりも高度な表現に触れられることに意義を感じていた。

一方で、参加者に偏りが生じていたという課題もある。英語を話すことに抵抗がある生徒の参加意欲を高めるために、平時の授業との連動をより意識し、「わかる」「通じる」という体験を重ねて自信をつけていける環境づくりを意識したい。また、1年生のような低学年の場合は、ゲームなど遊びの要素を多く取り入れた日を設定するのも有効かもしれない。

② 生徒の感想

〈1年生〉

- ・英語で話すのは難しいけれど、コミュニケーションの勉強になって良かったと思いました。
- ・ALTの先生と英語で会話をすることによって、コミュニケーション能力を高めることができたので、良かったです。また参加してみたいです。
- ・教科書の基本文だけでなく、使える応用バージョンができて楽しかった。また参加したい。
- ・英語の知識を増やすことができたが、もうちょっと日数を増やしてほしい。

〈2年生〉

- ・今年も楽しく話せました。もっと人がいると盛り上がると思います。
- ・自分では実感が湧きにくいですが、少しは話せるようになった気がします。

〈3年生〉

- ・小学生の頃に通っていた英会話の教室のような体験ができて楽しかった。英語の授業ではなかなか発せられない単語や文法に触れることができるため、勉強にもなった。
- ・イングリッシュルームはさまざまなことについてネイティブの方に来ていただき、話すことができたので、勉強になりました。英語が少しでも話せるようになったらいいなと思い、参加させていただき、本当に楽しかったです。下級生にもやってみたらいいと思います。
- ・普段あまり話すことのない外国の方と英会話をするのができ、良い経験になるし楽しい。英語で会話する力を少しずつつけることができ、将来役に立つと思う。

- ・ 本当の外国から来られた ALT の先生と話せて、良いと思う。
- ・ 英語は、興味はあるが決して得意ではない。だから、授業以外のときに英語に触れられる機会があるのはすごく嬉しい。自分が知らない話も聞けるので楽しい。
- ・ 授業では主に CD なので、授業以外の内容と話せて良かったが、聞き取れなかったことが多かったと思う。しかし、友達がいたのでわかることもあった。
- ・ どのようなことをするのか、はっきりわかっていなかったなので、英語が苦手な私にとってはあまり行く勇気が湧かなかった。

(文責：片山 翔)

【高等部】

高等部では、今年度も5月から3月まで、合計16回のイングリッシュルーム活動を実施した。具体的にはジョアンナさんというアメリカ人女性講師を招き、火曜日の放課後の約2時間、生徒が英語だけでコミュニケーションする時間を設けた。各学年とも最初の2回は、全員がそれぞれ6分ずつの個別の面談形式で行った。3回目以降は学年を2分割したクラスごとに希望者を募り、約40分間のグループでの英会話の機会を設けた。

生徒の感想

- ・ イングリッシュルームなどで英会話の練習を重ねたおかげか、英語で会話することが私にとって徐々に自然になってきています。6分間個人で英会話したときは時間があっという間に過ぎました。また、グループトークではアメリカのクリスマスの様子などを英語で聞くことにより、様子がより目に浮かび、理解が深まった気がします。
- ・ 私は、今年は個人だけでなく、何人かのグループでのイングリッシュルームにも参加しました。個人のフリートークでは英語で自分のことを知ってもらい、グループでは季節、時期に関するトークをして、英語でのゲームも行い、とても盛り上がり、楽しかったです。イングリッシュルームは楽しみながら英会話がよく出来て良かったのでまた来年も参加したいと思いました。
- ・ 普段の生活の中で、英語で長い時間会話をするという機会はないので、とても貴重なありがたい時間だと思っています。クリスマスについての話を聞いたり、歌やゲームをしたりしていつも楽しいです。これからも続いていくと有り難いです。
- ・ 自分は、英語は苦手ですが、わからない単語があってもしゃべりながら話の流れなどから意味が分かったり、どうしても内容がわからないときは日本語で説明してくださったりと、会話を楽しみながら自然に英語を話したり聞き取ったりする力が身につく場だと思います。ネイティブの英語に触れる貴重な機会だと思うので、これからも積極的に参加していきたいです。
- ・ 私は、英語を話すことに苦手意識があり、最初の頃はずっと緊張していました。ある時のグループでのイングリッシュルームで、上手く英語で伝えられずに困っていた私を友人が助けてくれ、二人で協力して伝えました。そのとき私は、英語で自分の考えを伝えることの楽しさを知ることができました。英検の面接などにも抵抗が減ったので、とても良い経験になっています。
- ・ I was able to enjoy the time. The most fun thing for me was to play the game using some verbs. I want to play that game again. Thank you!
- ・ ネイティブの先生のレッスンのため、より日常会話に近く、実用性が高いと感じた。最初は緊張もしていたが、先生がフレンドリーであったため、緊張もほぐれ、リラックスした環境で臨めた。今はまだ、つまずいたら先生が日本語でフォローしてくれているので、今度は困った時も英語で対応できるようにしたい。

(文責：宇野和博)

イングリッシュルーム活動

小学部、高等部普通科、高等部専攻科はエリザ先生を、中学部は英語の授業でお世話になっているコリン先生を講師として招き、各部毎イングリッシュルームを実施した。

1. 小学部

講師は児童と同じように補聴器を装用している難聴者であることもあり、児童は大変親しみを持って交流することができた。イングリッシュルームの講師との交流を、聴覚障害児の指導で重要な言語指導の一環ととらえ、次のような場を設定することにした。①全学年の児童と触れ合う。②3、4学年の児童と歌やゲームだけでなく、言葉でのやりとりを通して交流を深める。

①に関しては、講師の出身地であるドイツの様子や彼女が好きなものなどについて数週にわたって画像やドイツの簡単な手話を用いて話していただいた。美しいドイツの景色や名産品などについてのお話を児童はたいへん興味を持って聞き、もっと知りたいことを質問していた。質問は多岐にわたったが、適宜担当教員が通訳をして内容をおさえながら、児童は講師と英語と日本語でのやりとりを楽しむことができた。

②に関しては、3、4年生とアルファベットの歌を歌ったり、ゲームをしたりして楽しく活動した。講師との交流日の事前に一人ひとりがゲームだけではなく、講師との言葉でのやりとりで楽しむように、話し方や尋ね方を学習するようにした。そして、当日講師との言葉でのやりとりが成功し、自信をもって次のやりとりができるように励ました。

児童からは以下のような感想があった。

「自己紹介の練習をがんばった。ドキドキしたけれど上手にできてうれしかった。」

「エリザ先生の言っていることが分かった。」

「自己紹介の時とても緊張したけれど、ほくの英語をエリザ先生がわかってくれてうれしかった。」

「英語の歌を歌って楽しかった。また一緒に歌いたい。」

「エリザ先生の発音の仕方は、私たちとはちがうところがあるなあと分かった。」

このように聴覚を活用し、日本語との違いに気づいたり、ある程度練習して英語で通じ合えたことを喜んだりする感想が見られた。お互いに分かろうとして聞いたり話したりするコミュニケーションの基本を、講師との交流で自然に感じ取れたことが大きな収穫であった。

2. 中学部

主に昼食から昼休みにかけての時間に開設した。生徒全員が講師と話せる機会を保障し、もっと話したいという生徒たちがさらに交流できるように、前半の昼食時間は学年を指定して該当学年の生徒は全員参加とし、後半の昼休みの時間はどの学年でも自由に参加できるようにした。

はじめの頃は、季節や学校行事、時事に関する講師からの質問に対して、学習した文法などを用いて一生懸命答えることが中心であったが、徐々に、知りたい英語表現や講師に関して聞きたいことを生徒からも質問するようになり、やりとりが広がっていった。また、英語が得意でない生徒も、友だちに手伝ってもらいながら何とか伝えようとする様子が見られ、「授業と違ってあまり緊張しなかった」「絵やジェスチャーでも伝わるのがわかった」などと話していた。英語を用いるだけでなく、伝えたい、わかりたいという気持ちやそのために工夫しようとするのが大切だということを生徒たちが実感できたことは、大変意義深かった。

3. 高等部普通科

今年度は7回昼休みに実施し、そのうち4回は放課後も実施した。最初の数回は、担当者と講師が内容について事前に相談し、講師にあらかじめ準備していただいたスライドを使用して、自国の文化

等について紹介していただき、その内容に関する質疑応答を英語で行う形式で進めた。しかし、回数が進むにつれて、生徒との自由な会話も弾むようになり、秋ごろからはトピックを決めずに自由に生徒と講師が会話を進めることができた。

生徒は音声だけでの英会話は難しいが、中途失聴者である講師は、口頭での英語での発話に加えて、日本の手話、ドイツの手話、アメリカの手話をつけて、意思の疎通を図っていた。このことにより、英語に苦手意識を持つ生徒でも講師の話す内容がわかる場面が多かった。しかし、複雑な内容の会話になると、口話と手話の組み合わせだけでは生徒には理解が難しくなった。そのような場合は、iPad の筆談アプリ等を用いたコミュニケーション方法をとった。参加生徒の人数が少ない時は iPad の画面を直接見せ合い、より早く質疑応答を行ったり、お互いの発言にコメントを言い合ったりできた。人数が多い時は、昨年度同様、発言者の内容を TV モニターに投影する方法をとることで、複数の生徒と講師との自由な英会話を可能にした。今年度は、講師にも iPad を携帯してもらっていたので、生徒の発問に対して、昨年までのようにホワイトボードに書いて答えてもらうのではなく、iPad を用いて応答してもらうことが多く、より速く円滑にコミュニケーションが進んだ。

高等部普通科の生徒は委員会活動や部活動などの特別活動も多く、放課後に行ったイングリッシュルームへの参加は難しいことが多かったが、昼休みを利用したイングリッシュルームにはほぼ毎回参加する生徒もあり、大いに盛り上がった。聴覚に障害がある生徒は、たとえ英会話に興味があったとしても、他の多くの高校生が行っているように英会話スクールに通うなどの行動がとれないことが多い。引き続き、外国の方が来てくださり、英語で自由に会話ができる機会を学校で提供することは、生徒の国際的なあるいは異文化コミュニケーションの視点を養うのに重要であると感じている。

4. 高等部専攻科（造形芸術科 ビジネス情報科 歯科技工科）

専攻科では全7回昼休み（12：50～13：10）に開催し、今年度も多くの生徒が参加した。序盤では講師の自己紹介や出身国であるドイツの文化について話を聞き、生徒からは日本との文化の違いや趣味などについて英語でのコミュニケーションを楽しんだ。講師とのやり取りを進める中で、今年度の専攻科におけるイングリッシュルームは「comics」をテーマとして進めることとなった。具体的には、ワークシートを使って日本の漫画を英語で紹介したり、ドイツをはじめとする海外の漫画と日本の漫画の違いなどについて議論したりするなど、会話を楽しむ様子が見られた。イングリッシュルームでは、専攻科で活用している iPad の辞書機能や翻訳ソフトを使い、講師からの質問の意味を日本語に翻訳して理解したり、伝えたいことを英文にして質問したりする様子が見られた。ドイツと日本の漫画の違いについて生徒からは「日本の漫画は右から読むけど、ドイツの漫画は左から読むんだね」「ドイツは色があるけど、日本は色が無いよ」「ドイツの本の方が大きい！」「厚さも違うね」「日本はオノマトペを使っているけれど、ドイツにはないよ」など活発な意見が出された。最初はとまどっていた生徒も友だちの発言に刺激を受け、回を追うごとに積極的なやり取りが交わされるようになった。今年度は補助教員による PC を使った英語の情報保障も試みた。講師の発話を逐次文字で表示することによって、より英会話が楽しめたのではないかとと思われる。専攻科の生徒たちの様子や表情から、イングリッシュルームが英語を使ったコミュニケーションの楽しさを味わうことのできる有意義な時間になったのではないかと感じた。



中学部の様子



高等部普通科の様子



高等部専攻科の様子

児童生徒の主体的な学習を引き出すイングリッシュルーム

1. 活動報告

3名の外国人講師が、それぞれ小学部、中学部、高等部の学部ごとに設定された部屋で待機し、児童生徒のニーズに対応する形で実施している。小学部は学校行事や放課後に実施される各種検定等と重ならない限り、毎週木金の2回行い、そのうち木曜は午前授業で終わる低学年向けに1時間と放課後の1時間、計2時間で開催している。中学部は金曜、高等部は木曜、いずれも放課後の1時間で、月平均2～3回開催している。しかしながら、講師の都合や学校行事、各種検定等との重なりを回避するため、金曜開催が難しいことが多く、中高合同で開催することにより、生徒がイングリッシュルームに参加する機会の確保に努めている。これらの活動内容や進め方は、各担当者がその場に集まった児童生徒の実態や英語の学習状況によって設定しているため様々である。

小学部では、歌やゲームを通じてコミュニケーションを取る際に必要な単語（曜日、月、天気、色、動物、数、食べ物、体の部位など）や表現（挨拶、自己紹介、好きなもの、できることなど）に慣れ親しんでいる。また、ハロウィーンパーティやクリスマスなど英語圏の文化に触れるイベントを行い、保護者も交えた交流を行っている。

中学部では、生徒が知っている単語や表現を実践的に用いることができるような活動内容を計画している。その際、普段の授業とは違い、ゲーム感覚も取り入れながら楽しく英会話を行っている。

高等部では、「日本語（外来語）と英語の違い」、「英語話者の中にもある地域ごとのアクセントの違いや方言」などの文化の違いを紹介することで生徒の興味・関心の幅を広げている。ICTを活用し、音と綴りの法則性を学ぶという活動も行うこともある。全体的に、話題の幅の自由度が高く、新たな表現や日常に即した英語の知識を吸収しながら英会話を楽しんでいる。

どの学部においても、児童生徒はイングリッシュルームを楽しんでおり、積極的に活動に取り組んでいる。また、ICTなどを活用し、実際に目で見て、耳で聞いて身近に感じながら実践的な英語に触れることができている。そして、英語力だけでなく、コミュニケーションをとろうとする態度や表現しようとする意欲を高めている。この点において、イングリッシュルームは、本校の国際教育活動を支える大きな役割を果たしていると考えられる。



2. 児童生徒のアンケート回答より抜粋（回収数：小 30/36、中 22/23、高 19/23）

アンケート質問項目

（1）イングリッシュルームに参加しなかった理由

- ・ 曜日、時間が合わない (多数)
- ・ 放課後だと帰宅時間やお迎えの時間の都合が合わない (多数)
- ・ 進路など他の活動を優先させたかったから (高3)

(2) イングリッシュルームが楽しいと思った理由

- ・みんなで歌ったりクイズをするのが楽しい (小3 保護者代筆)
- ・自分の学年以外の子供と学べるのが楽しい (小4 保護者代筆)
- ・夏休み中は集中的に書くことなども学習できてよかった (小5 保護者代筆)
- ・物語や問題を英語で何を言っているのかを理解して進めることが楽しかった (中2)
- ・道の案内の方法など実践的な英語を学ぶことはありがたいです (中3)
- ・自分が話した英語が通じ、ALT の英語が聞き取れたこと (高3)

(3) イングリッシュルームが役に立つと思った理由

- ・自分の周りにあるものが英語で言えるようになるから (小4)
- ・単語をいろいろ楽しみながら学べるので日常生活などに役立つと思うし、英語の授業がどんどん楽しくなってきたなと思います (中1)
- ・将来使いそうな英語 (ex. 道案内の方法) を学べるから (中3)
- ・自分とは異なったものの捉え方、文化、習慣を学ぶことができるから (高3)

(4) イングリッシュルームで学んだことを、他のどんな場面で使うようにしているか

- ・家で家族と話す時。 (小学生多数)
- ・外国人の知人に話しかけている (小～高校生)
- ・英語の塾や英検、英語の授業 (中高多数)

(5) イングリッシュルームに参加して自分は変わったと思うこと

- ・英語が (もっと) 好きになった (多数)
- ・英語で何て言うんだろうと考えるようになった (小4 保護者代筆)
- ・英語が好きになって、授業もわかるようになり、楽しくなって、人前に出るのが前よりも楽しくなった。 (中1)
- ・外国の方と話すこと / 英語を話すことに抵抗がなくなり、外国の人と話したいと思うようになった (小～中学生)

(6) 自由記述 (その他の感想や今後の要望について)

- ・色々な (フラワー) の名前が英語で知りたい (小2)
- ・ER を続けて行ってほしい (小～高校生多数)
- ・もっと難しい英語も学びたい (小4)

児童生徒は、イングリッシュルームに参加することに関して、「楽しく英語を学べる」や「英語が身近になった」という感想を抱いている。また、その場を楽しむだけでなく、普段の生活の中で、イングリッシュルームで吸収した知識を積極的に用いているようである。特に中高生は普段の英語の授業や海外交流、高等部内で行われる国際交流で率先して交流しようという気持ちが生まれるきっかけになっている。

しかしながら、ALT と接する機会をできる限り確保するために中高合同で行う回数を今年度は増やしたが、習熟度の差が会話にも表れており、アンケートに「中高 ER は嫌いじゃない・・・ちょっと難しいです」というような中学生からの回答があったため、来年度以降は児童生徒の習熟度に応じた参加ができるような運営を考えていく必要がある。イングリッシュルームは、英語の得手不得手にかかわらず「もっと英語を知りたい・使いたい」と児童生徒自らが感じることができ、英語を身近に楽しむ場であることを第一に考え、そこから英語学習に取り組む姿勢を育成し、その他の国際教育活動にもつなげていきたいと考える。

6. おわりに

これまでの国際教育を振り返って

附属学校国際教育推進委員会委員長 濱 本 悟 志

「報告書（第10集）」を刊行し、お届けすることができました。筑波大学附属学校群には様々な学校種があり、そこで幼稚園の幼児から高等部専攻科の学生までが学んでいます。そのため、国際教育のプログラムは多岐にわたります。この報告書を通して、学校種や対象年齢に応じた特色あるプログラムをお伝えし、少しでも今後の国際交流や人材育成にお役に立ちたいと考えています。

筑波大学学校群では、第2期中期目標・中期計画（平成22～27年度）の策定に先立ち、「先導的教育」「国際教育」「教師教育」の3つの拠点構想を立ち上げ、現在まで進めてきました。この間、附属高等学校と附属坂戸高等学校がSGH校の指定を受け、附属駒場高等学校がSSH研究開発を継続し、その活動の中で国際教育を推進する様々なプログラムを開発してきました。附属小学校の児童や附属中学校の生徒も高校生に負けていません。教室でのイングリッシュルームを活かし、早い時期から異文化や外国語に触れる機会を多く設けましたが、さらに多くの子どもたちが海外研修を経験するまでに発展しました。特別支援学校の5校でも、児童生徒や教員の国際教育を盛んに行っています。海外の盲学校、聾学校、特殊教育学校等との生徒間交流、JICA研修を積極的に受入れた教員研修等を実施すると共に、生徒が自ら「トビタテ！留学JAPAN」で海外研修を実施するまでに発展しました。その成果は附属学校群主催のシンポジウム等で発表され、多くの附属学校で共有しました。この10年間の国際教育の歩みを振り返ると、国際教育によるグローバル人材の育成が急テンポに展開していることが分かります。

なぜ、グローバル人材の育成が急がれるのか。Society5.0では、その背景として日本の少子高齢化と労働人口の減少、経済のグローバル化、国際的な競争の激化、富の集中や地域間の不平等、エネルギーや温室効果ガス等の地球規模の課題などを取り上げると共に、IoT、ロボット、人工知能（AI）、ビッグデータといった社会の在り方に影響を及ぼす新技術への積極的な対応が挙げられています。そして、経済発展と社会的課題の解決を両立していく新たな社会として、Society 5.0の実現を目指しています。これを受け、産業界からは次世代を担うイノベティブなグローバル人材の育成が求められています。それを念頭に、文部科学省は次年度からのSGH後継事業として、「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」や「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」を立ち上げました。

一方、教育現場でも将来の日本や国際社会を見据え、教育的な観点からグローバル人材像を描き、そのもとで教育課程や実践プログラムが作成されています。附属学校群では、将来の国際社会において、文化教育の異なる海外の人々と協働して国際社会問題に取り組み、問題提起から解決に至る過程でリーダーシップ及びフォロアーシップを発揮できる人材の育成を考えています。そのためには、相手の抱えている課題から地球規模の課題まで、当事者の立場に立った視点で解決の道を探る姿勢が不可欠です。その素養として、先日の附属学校研究発表会（2019年2月23日開催）の四校研からの発表で「柔軟性」「主体性」「表現力」の重要性が指摘されました。これはグローバル人材の育成に限らず、SDGs等の課題に取り組みダイバーシティ社会の実現を目指す姿勢とまったく同じです。この観点から、第3期中期目標・中期計画では3拠点構想を発展させ、「グローバルな素養を育てるカリキュラム開発」と「筑波型インクルーシブ教育システムを目指したプログラム開発」を目指しました。今後もこの方針を継承し、次世代を担う子どもたちの教育を推進していきたいと考えています。

(資料) 附属学校の国際交流協定締結状況

項目 学校名	締結相手 (国名、機関名)	協定締結日	現締結期間	交流の分野	締結の目的	締結の経緯
附属小学校	光州松源初等学校	2016.10.11	2016.10.11～ 2019.10.10	教員同士の授業技術 の交流		
附属中学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属 高校	2006.12.1	2011.4.28～ 2016.4.27	中等教育全般	中学校のレベルで、生徒 の相互交流の意義とその 可能性を考慮したため	北京師範大学と筑波大学との交流を目的 として結ばれた協定のなかで、北京師範 大学第二附属高校と筑波大学附属中・高 等学校及び附属駒場中・高等学校も付随 して結ばれたもの。
附属高等学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属 高校	2006.12.1	2011.4.28～ 2016.4.27	教育に関する分野	相互の学校交流と生徒間 交流	筑波大学が北京師範大学と交流協定を結 んだ際、附属高等学校も交流組織の一つ として参加した。
附属駒場中・ 高等学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属 高校	2006.12.1	2011.4.28～ 2016.4.27	北京師範大学附属実 験中学との中等教育 分野での交流	生徒の国際交流の促進	筑波大学と中華人民共和国北京師範大学 との交流協定締結に協力した。
	中華民国(台湾) 国立台中第一高級中学	2015.12.11	2015.12.11～ 2020.12.10	研究発表(主に理系 分野)、文化交流な ど	両校は、学術交流と学校 間の提携を促進し、生徒 達の国際的な視野の拡大 を促進することを目的と する。	本年4月、相手校から姉妹校協定締結 の申し出あり、5月1日に本校校長他 が訪問した際に詳細な打合せを行った。 5月27日、相手校校長が来校し、詳 細事項を詰めた。
附属坂戸高等 学校	インドネシア共和国 ボゴール農科大学附属 コルニタ高等学校	2010.12.1	2015.12.1 ～2020.11.30	国際教育(教員間の 教育研究、生徒の協 力的教育活動)	生徒・教員の相互交流お よび生徒同士の協働的 教育活動の実施	交流は筑波大学農林技術センターが 2008年に採択を受けた文部科学省 「国際協カイニシアティブ」教育協力拠 点形成事業に端を発する。その後トヨタ 財団「アジア隣人プログラム」の助成を 受けた活動や「アジア高校生聞き書きプ ログラム」などで協働。
	インドネシア共和国 林業省附属林業教育セ ンター	2013.3.19	2013.3.19 ～2018.3.18	国際教育・ESD(教 員間の教育研究、生 徒の協力的教育活 動)	生徒・教員の相互交流お よび生徒同士の協働的 教育活動の実施	以前からの「アジア隣人プログラム」や 「アジア高校生聞き書きプログラム」等 でのインドネシアでの活動の際に協力を 得たことから交流が始まった。林業教育 センター・インドネシア林業省・在日イ ンドネシア大使館の強い要望を受け協定 締結に至った。
	インドネシア共和国 国立パダン第6高等 学校	2015.9.1	2015.9.1～ 2020.8.31	国際協働学習、 ESD、ユネスコス クール間の国際ネッ トワーク構築	生徒及び教師の異文化理 解及び国際的研究活動の ため	2012年5月のインドネシアユネスコ 国内委員会との交流を契機として、毎年 本校と同委員会との交流を深めていっ た。2014年ユネスコスクール関係者 他が来校し、パダン校から強い関心を示 され、2015年本校教諭が訪問し準備 を本格的に進めることで合意した。
	フィリピン大学附属ル ーラル高等学校	2015.9.1	2016.11.1～ 2021.10.31			
	タイ カセサート大学附属高 等学校	2017.11.9				
附属聴覚 特別支援学校	フランス共和国 国立パリ聾学校	2003.9.22	2015.12.1～ 2020.11.30	初等中等教育(特別 支援教育)における 生徒間交流	フランスと日本両国の友 好と親善を促進すると ともに、両国の聴覚障害教 育の発展に寄与する	1999年頃、本校高等部専攻科生徒と パリ聾学校高等部職業科生徒の間で文通 を開始した。 2002年、パリ聾学校長から姉妹提携 の申し出があり、2003年9月、パリ 聾学校にて、交流協定書を交わした。
	大韓民国 国立ソウル聾学校	2015.6.1	2018.6.1～ 2023.5.31	生徒間の学習活動の 交流、聴覚障害教育 および関連分野に関 する情報交換	両校は、特別支援教育と りわけ聴覚障害教育に関 わる教員交流・生徒交 流・情報交換を通して、 両国の文化について深く 学び合うとともに聴覚 障害教育関連の活動を推 進し、両国並びに両校の 発展に寄与する。	2008年、筑波大学教員と本校校長他 が美術教育におけるICT教材の共同研 究をすすめるために訪問、その後、本校 中学部生徒とのE-mailでの交流活動 を行うなど交流協定の基盤を築き締結に 至った。

(2018 年 4 月～ 2019 年 3 月)

締結のメリット	協定締結後の構想			その他参考になること
	教員の交流方法	児童・生徒等の交流	その他	
現在、本校は実交流をしていないので、現状ではなし。		現在は特になし	現在は特になし	現在、中学校（中等教育）レベルでの実交流はされていないが、今後将来に向け本協定が両者間（中等教育）にとって有益となる事例を検討していきたい。
相互の文化交流と人的ネットワーク作り及び情報交換	意見交換・情報交換	相互の一日体験入学及び文化交流		2009 年 10 年に相互交流を実施
この協定をきっかけに、2007 年、2008 年に SSH（スーパーサイエンスハイスクール）事業で訪問することができた。	SSH 事業として北京を訪問	SSH 事業として北京を訪問		
国立台中第一高級中学は理数系に優れ、大学からの指導・サポートを受けていることなど、本学が取り組む高大連携にとって非常に参考になる。				
・本校の生徒に交換留学生としてインドネシアに渡航できる機会を与えられる。 ・本校の教員に国際的な教育研究活動を行う場を提供できる。 ・インドネシアから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できる。④高校生、学類生、大学院生の国際協働学習の機会を与えられる。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	・交換留学（現地校で他の生徒とともに授業等に参加、期間は 1 ヶ月程度～1 年の間で状況に応じて実施） ・プロジェクト活動（SGH 事業における日本およびインドネシアでの合同フィールドワーク、環境問題等についてのネット会議、など）		
異文化理解の促進および協働学習活動を通じての国際教育の実現。センターに附属する 5 つの学校がインドネシア各地にあり、本校としても活動フィールドを飛躍的に広げられる。付加的要素として将来的にインドネシアから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できるかもしれない。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的交流活動（交換留学含む）		
・附属坂戸高等学校のスーパーグローバルハイスクール事業に関する支援 ・スーパーグローバル大学事業、大学の世界展開力事業に対する支援 ・ESD およびその後継事業である GAP 活動に関する国際協力 ・生物多様性保全に関する学術交流の促進支援	・高校生国際 ESD シンポジウムにおいて、教員間の交流を図る。 ・日本およびインドネシアのユネスコスクール活動や ESD に関する情報交換、教材研究を行う。	・高校生の国際交流。ESD に関するシンポジウムや SGH 研究大会における課題研究の成果発表と共有。 ・交流人数：派遣 5 人／年（最大）、受入れ 5 人／年（最大）	世界のユネスコスクール間の国際連携モデルをなるように両校の交流を進めていく。	インドネシアユネスコ国内委員会との連携
日本の聴覚特別支援学校（聾学校）を代表する本校が、世界最初の聾学校である国立バリ聾学校と交流関係を持つことは、グローバル化を目指す筑波大学に寄与できる。	教科指導や聴覚障害教育におけるグローバル人材育成についての情報交換および意見交換。	交流会や授業交流（英語・体育等）の実施		
スーパーグローバル大学である本学の附属学校として、聴覚障害教育の専門性の向上に貢献でき、韓国の特別支援教育に関する最新情報（障害者の権利に関する条約批准の状況、教育課程、教科書等）を得ることができる。	学校訪問、情報交換	ネットワーク回線を利用した遠隔地間授業交流	研究会等での発表	

項目 学校名	締結相手 (国名、機関名)	協定締結日	現締結期間	交流の分野	締結の目的	締結の経緯
附属大塚 特別支援学校	インドネシア共和国 チバガンティ特別支援 学校	2018.2.	2018.2. ～ 2020.2	知的障害特別支援学 校における授業研究 会とおした情報交 換・交流	・授業研究会による交流 において教師の授業力の 向上を図る	2017年11月に、本校の教諭2名が チバガンティ特別支援学校を訪問した。 授業研究会に参加し、インドネシア教育 大学にて日本の知的障害特別支援学校の 教育について講演をした。講演には、イ ンドネシア国内から特別支援教育に携わ る500人以上の教員が集まり、日本の 特別支援教育への関心の高さが窺えた。 授業研究交流を通して互いに意見交換を 行うことで、双校の教師の授業力の向上 を期待できると考えた。
附属桐が丘 特別支援学校	大韓民国 広州セロム学校 (旧セロム学校)	2010.2.3	2015.2.13 ～ 2018.2.12	・児童生徒間の学習 活動の交流 ・肢体不自由教育及 び関連分野に関する 情報交換	・日韓両国の肢体不自由 教育の充実と発展に寄与 するため。 ・国際教育の視点の一つ である日韓の相互理解と 親善を図るため。 ・附属学校の中期目標に 挙げている“国際教育拠 点事業”の一層の充実を 図るため。	2007年・2008年、両校の研究部長 が双方で開催された研究会に出席し、そ れぞれ取組を発表。2008年度末、本 校の代表生徒1名を含む訪問団を同校 に派遣。2009年、校長ほか2名が同 校を訪問し、国際交流協定締結に向けた 事前調整を実施。同時にスカイプを使っ た交流授業を開始。2010年2月、再 び同校の校長、研究部長等を本校の研究 協議会に招聘し、開催前日に国際交流協 定を締結。
	台湾 国立南投特殊教育学校	2016.11.24	2016.11.24 ～ 2021.11.23	・児童生徒間の学習 活動の交流 ・特別支援教育及び 関連分野に関する情 報交換	・両校の交流活動（相互 訪問等）や教員間の情報 交換を実施しやすくす るため。 ・児童生徒の異文化体験 の機会を確保し、児童生 徒の気付きや学びを複眼 的・多角的に深めていく ため。 ・日台双方の肢体不自由 教育及び特別支援教育の 発展に寄与するため。	2014年5月、台湾国立南投特殊教育 学校の校務顧問が来校し、国際交流協 定締結の可否について打診。これを受け、 同年11月に本校校長ほか3名が同校 を視察し、国際交流協定の締結の可否に ついて検討。2015年10月、同校校 長を含む訪問団が来校し、その際に 2016年の国際交流協定締結を約束す るに至った。
	台湾 国立和美実業学校	2016.11.25	2016.11.25 ～ 2021.11.24	・児童生徒間の学習 活動の交流 ・特別支援教育及び 関連分野に関する情 報交換	・両校の交流活動（相互 訪問等）や教員間の情報 交換を実施しやすくす るため。 ・児童生徒の異文化体験 の機会を確保し、児童生 徒の気付きや学びを複眼 的・多角的に深めていく ため。 ・日台双方の肢体不自由 教育及び特別支援教育の 発展に寄与するため。	2014年11月、本校校長ほか3名 が、台湾唯一の肢体不自由者を教育する 特殊教育学校である同校を視察。 2015年11月、本校副校長ほか2名 と代表生徒2名で同校を訪問し、国際 交流協定締結の可否について打診。その 際、2016年の国際交流協定締結につ いて内諾を得た。
附属久里浜 特別支援学校	中華人民共和国 浙江省寧波市 達敏学校	2011.8.29	2016.8 ～ 2021.8	・教員間の教育実践 研究 ・児童生徒間の教育 活動	・日中両国の自閉症児教 育の充実と発展に寄与 するため。 ・日中の相互理解と親善 を図る。	2009年5月、中国寧波市達敏学校校 長が本校を訪問し教育実践を視察の結 果、本校への教員派遣・研修の実施の希 望があり、3回にわたって教員研修の受 け入れを実施。2011年度、達敏学校 が全中国の特別支援学校の研究指定校と なり、国際的な研究会議や研究発表等の 実施を予定していたため、それに向けて 本校との姉妹校協定締結について申し出 があり、同年8月29日に協定書を交 わした。2016年8月に締結期間を5 年延長。
	中華人民共和国 江蘇省蘇州工業園区 仁愛学校	2014.9.28	2014.9.28 ～ 2019.9.27	・教員間の教育実践 研究	・日中間の文化交流を深 め、両国の特別支援教育 領域の促進を図るため。	2014年1月、副校長と小学部主事お よび幼稚部教諭の3名で中国江蘇省蘇 州工業園区仁愛学校の求めに応じ視察を 行った。その後、立命館大学に留学予定 のある教員が本校の実践研究協議会に参 加した。同校の校長や教員から、本校へ の教員派遣・研修の実施の要望があり、 2014年9月の2度目の視察の際に 日中自閉児教育研究会を同校にて実施す るとともに、本校との姉妹校協定締結を行 った。

締結のメリット	協定締結後の構想			その他参考になること
	教員の交流方法	児童・生徒等の交流	その他	
<ul style="list-style-type: none"> ・授業研究交流を通して互いに意見交換を行うことで、双校の教師の授業力の向上を期待できる。 ・交流を通して得られた知見の発表し、知的障害教育の実践分野における国際教育拠点として貢献できる。 	互いの学校の授業研究会に教諭をそれぞれ派遣し、情報交換、意見交換を行う。	平成 30 年度は教員間の交流のみを実施したが、今後生徒の交流としてはインターネット回線やビデオレター等を使った交流を考えている。		
<ul style="list-style-type: none"> ・お互いの学校の研究テーマに沿って意見交換、情報交換ができる。また、研究発表の場を相互に設けることができる。 ・児童生徒の異文化理解を広げ、海外の児童生徒とコミュニケーションする機会を確保することができる。(外国語学習への意欲を高める。) ・筑波大学と桐が丘特別支援学校の存在を韓国でより広く知ってもらえる。 	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換、研究会参加、研究成果共同出版。	学校訪問、ビデオレター等の交換、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介、スカイプを使った交流授業。		2010 年、高等部 3 年が韓国に修学旅行で渡航し、三育再活学校（現セロム学校）を表敬訪問。当初、高等部生徒による交流活動だけであったが、2012 年より小学部児童・中学部生徒も交流活動に加わるようになった。
<ul style="list-style-type: none"> ・韓国セロム学校との国際交流に加え、新たに台湾交流を始めることにより、児童生徒の異文化理解の場を広げることができる。 ・国際教育拠点事業の拡充につながる。 	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換。	学校訪問、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介、スカイプを使った交流授業。		現時点では、高等部生徒による交流活動のみ。
<ul style="list-style-type: none"> ・韓国セロム学校との国際交流に加え、新たに台湾交流を始めることにより、児童生徒の異文化理解の場を広げることができる。 ・国際教育拠点事業の拡充につながる。 	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換。	学校訪問、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介。スカイプを使った交流授業。		現時点では、高等部生徒による交流活動のみ。
特別支援学校関係での中国との交流は、まだ十分とは言えず、この交流が実現すれば、今後のこの分野における教育の充実の基礎となることが期待される。	・自閉症児への指導方法、指導内容等にかかわって、研修交流及び研究にかかわる指導助言。	予定なし	達敏学校の教育実践の様子を視察するとともに、実践研究について交流し、必要に応じて指導助言する予定。また 2012 年度の達敏学校を会場として行われた研究会に参加した。	2012 年度は訪中して達敏学校の授業参観や研究会の具体化を計画したが、日中関係の悪化によって見合わせた。ただし、日常的にカンファレンスなどの実績ができるよう、通信環境や機材の整備を行った。訪日した校長や副校長と今後の交流の在り方に関する意見交換を行った。2017、2018 年度と 2 回に分け、達敏学校の全教員の研修を受け入れた。
中国は近年自閉児教育の充実に力点を置いていて、日本の教育的支援を強く希望している。両国の自閉症を中心とした特別支援教育の発展に向けて本校が貢献できるよい機会となる。	・自閉症児への指導方法、指導内容等にかかわって、研修交流及び研究にかかわる指導助言。2015 年以降は、本校の公開授業の動画データなどを用いて、skype によるケースカンファレンスや授業研究会などを定期的に行っている。	本校のきらきらコンサート、運動会などの催しを skype にて配信し、児童間の交流も行う予定である。	定期的に同校から教員の派遣を受け入れ、本校において研修を行う予定である。	

締結・更新の記録

年 度	学 校 名	新規／更新	相手校・機関
平成 21 (2009) 年度以前	附属中学校	新規	北京師範大学第二附属高校（中華人民共和国）
	附属高等学校	新規	//
	附属駒場中・高等学校	新規	//
	附属聴覚特別支援学校	新規	国立バリ聾学校（フランス共和国）
	附属大塚特別支援学校	新規	大邱大学校大邱保明学校（大韓民国）
	附属桐が丘特別支援学校	新規	三育再活学校（大韓民国）
平成 22 (2010) 年度	附属坂戸高等学校	新規	ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア共和国）
平成 23 (2011) 年度	附属中学校	更新	北京師範大学第二附属高校（中華人民共和国）
	附属高校	更新	//
	附属駒場中・高等学校	更新	//
	附属久里浜特別支援学校	新規	浙江省寧波市達敏学校（中華人民共和国）
平成 24 (2012) 年度	附属坂戸高等学校	新規	林業省附属林業教育センター（インドネシア共和国）
平成 26 (2014) 年度	附属桐が丘特別支援学校	更新	セロム学校（旧三育再活学校）（大韓民国）
	附属久里浜特別支援学校	新規	江蘇省蘇州工業園區仁愛学校（中華人民共和国）
平成 27 (2015) 年度	附属駒場中・高等学校	新規	国立台中第一高級中学（台湾）
	附属坂戸高等学校	更新	ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア共和国）
	//	新規	国立バダナン第 6 高等学校（インドネシア共和国）
	附属聴覚特別支援学校	更新	国立バリ聾学校（フランス共和国）
	//	新規	国立ソウル聾学校（大韓民国）
平成 28 (2016) 年度	附属小学校	新規	光州松源書等学校（大韓民国）
	附属坂戸高等学校	新規	フィリピン大学附属ルーラル高等学校（フィリピン共和国）
	附属桐が丘特別支援学校	新規	国立和美実験学校（台湾）
	//	新規	国立南投特殊教育学校（台湾）
	附属学校久里浜特別支援学校	更新	浙江省寧波市達敏学校（中華人民共和国）
平成 29 (2017) 年度	附属坂戸高等学校	新規	カセサート大学附属高等学校（タイ）
	附属大塚特別支援学校	新規	チバガンティ特別支援学校（インドネシア共和国）
	附属桐が丘特別支援学校	更新	社会福祉法人 SRC 附属広州セロム学校（旧セロム学校）（大韓民国）
平成 30 (2018) 年度	附属聴覚特別支援学校	更新	国立ソウル聾学校（大韓民国）

(資料) 報告書発行の記録

第1集 (2007～2008年度) 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想に関わって～	2009年2月発行
第2集 (2009～2010年度) 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2011年7月発行
第3集 (2011年度) 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2012年3月発行
第4集 (2012年度) 新たな国際教育の展開 ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2013年3月発行
第5集 (2013年度) 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～グローバル人材の育成を目指して～	2014年3月発行
第6集 (2014年度) 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～グローバル人材育成の充実を目指して～	2015年3月発行
第7集 (2015年度) 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～ダイバーシティ共生社会を創る人材育成の発展を目指して～	2016年3月発行
第8集 (2016年度) 附属学校群の国際教育の推進	2017年3月発行
第9集 (2017年度) 附属学校群の国際教育の推進	2018年3月発行
第10集 (2018年度) 附属学校群の国際教育の推進	2019年3月発行

平成 30 年度附属学校国際教育推進委員会名簿

委員長	濱本 悟志	附属学校教育局教授・教育局次長
副委員長	小林 美智子	附属学校教育局教諭・教育長特命補佐
	茂呂 雄二	筑波大学副学長・附属学校教育局教育長
	雷坂 浩之	附属学校教育局教授・教育長補佐
	下山 直人	附属学校教育局教授、附属久里浜特別支援学校長
	飯田 順子	附属学校教育局准教授
	木村 範子	附属学校教育局講師
	鷺見 辰美	附属小学校
	升野 伸子	附属中学校
	川崎 宣明	附属高等学校
	八宮 孝夫	附属駒場中・高等学校
	建元 喜寿	附属坂戸高等学校
	佐藤 北斗	附属視覚特別支援学校
	石井 清一	附属聴覚特別支援学校
	深津 達也	附属大塚特別支援学校
	小園 慶子	附属桐が丘特別支援学校
	西田 泉	附属久里浜特別支援学校

